

井上光晴の原爆文学の現代的意義

The Implications for the Present of Mitsuharu Inoue's *Gembaku* (Atomic Bomb) Literature

金子 章 予
Akiyo KANEKO

要旨

著者の現在の研究の目的は、原爆と生政治と間の関係性を中心として、現代社会における原爆文学の意義を見出すことにある。本稿は、原爆文学の中でも、『日本の原爆文学全集』に所収された井上光晴の作品を取り上げる。

井上は、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下の悲劇や結果に関する小説やエッセイを数多く残した日本の小説家である。本稿においては、『日本の原爆文学全集』に所収された井上の五つの小説を通して井上は何を本当に訴えたかったのかを分析し、現在の世界、国家としての日本、日本社会、そして現代を生きる私たちにとって井上の五つの小説がもつ意味あるいは示唆を見つけ出す。

まず、「原爆文学」と「原爆文学研究」の意味について簡単に触れる。次に、井上の五つの作品を分析し、それぞれの作品の意義を指摘する。

最後に、筆者は、井上の原爆文学は、日本社会と世界に隠された構造—現在の日本社会あるいは世界においては、国は国民の生命を守ることに失敗し、また人々は他者を利用したり人間の尊厳を貶めたりすることによって自分たちの生にしがみついているという姿—を明らかとすることにより、現在の日本社会と私たちの未来を変える試みである、と結論している。

Abstract

The aim of the author's present research is to explore the implications of *gembaku* (Atomic Bomb) literature, focusing on the relationship between atomic bombings and biopolitics. From among the works of *gembaku* literature, this article pays special attention to Mitsuharu Inoue's novels, which are included in the complete series of "Japanese *Gembaku* (Atom Bomb) Literature."

Mitsuharu Inoue is a Japanese novelist who wrote a number of novels and essays concerning the tragedies of the atomic bombings of Hiroshima and Nagasaki, as well as the consequences of these bombings. This article discusses what Inoue really hoped to achieve through his five novels concerning the atomic bombs; the novels are analyzed for their meanings and implications for the present world, including for Japan as a nation-state, Japanese society, and the current global population.

First, the meanings of "*Gembaku* literature" and "*Gembaku* literature studies" are briefly

discussed. Then, Inoue's five works concerning the atomic bombing of Hiroshima and Nagasaki are analyzed and the implications of each work are examined.

Finally, the author concludes that Inoue's *gembaku* literature was meant as a challenge to society in the present and also the future. This is because his novels clarify the hidden structure not only of Japanese society but also of the rest of the world, where governments failed to keep their people safe; as a result, people tried to assert control over their own lives by abusing others and denigrating human dignity.

[キーワード]

原爆文学、原爆文学研究、生政治、井上光晴、原発文学

Keywords : gembaku (atomic bomb) literature, gembaku (atomic bomb) literature studies, bio-politique, Mitsuharu Inoue, gempatsu (nuclear power plant) literature

1. はじめに

1.1 奇妙で危険な世界としての現代

ローマクラブ¹による報告書『成長の限界』² (1972) の編集長を務めたアーヴィン・ラズロ³ は、私たちは今、「奇妙な世界にいる」(ラズロ 2010 : 27) と表現する。それはまるで、「沈み

ゆくタイタニック号のデッキで椅子取りゲームでもしているようなもの」(ラズロ 2010 : 27) だという。なぜなら、環境は破壊され気候変動まで起こっているにもかかわらず、人々は、まだ金儲けと特権にしがみつくと夢中になっているから (ラズロ 2010 : 27) である。

このラズロの表現は、制御することが不可能な放射能によって自分たちの社会や世界が滅亡

¹ ローマクラブ (The Club of Rome) は、学際的かつホリスティックな〔全てが有機的に繋がっており、地球・環境・人類等あらゆるものが全体性のあることに価値があるとする〕方法によってより良い世界を築くことに貢献することに関心を抱いて長期にわたって探究してきた政界、産業界、学界におけるリーダー達によって1968年にされた非営利団体。現在、約100名の個人会員と30を超える国家・地域会員を有し、スイスのヴィンタートゥール (Winterthur) にある国際センター、ウィーンの欧州支援センター、並びにローマクラブ基金を有している。(www.clubofrome.org 2015年7月2日閲覧)

² Donella H. Meadows, Dennis L. Meadows, Jorgen Randers and William W. Behrens III. *The Limits to Growth*. New York : Universe Books, 1972 (邦訳ドネラ H.メドウズ著『成長の限界—ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社、1972年)。ローマクラブがデニス・メドウズ (1942年生。アメリカの環境学者。当時マサチューセッツ工科大学教授。専門はシステム力学) をプロジェクトリーダーとする国際チームに委託して資源と地球の有限性についてとりまとめた研究の報告書。このまま人口増加や環境汚染が続けば100年以内に地球上の成長は限界に達することを明らかにし、ゼロ成長論を提案した。

³ アーヴィン・ラズロ (Ervin László : 1932-) は、「システム哲学」と「一般進化理論」の創始者。ダライ・ラマ法王14世、ゴルバチョフ氏、アーサー・C・クラーク氏、ピーター・ガブリエル氏などノーベル平和賞受賞者を含む「世界賢人会議」と称されるブタペストクラブの主宰者。(以上、<http://worldshift-osaka.com/blog/html> 2015年6月27日閲覧) ベルリン国際平和大学理事長、ユネスコ事務局長顧問を歴任。国連調査訓練研究所 (UNITAR) 所長として、発展途上国の抱える数々の課題解決で実績を上げてきたことにおける評価も高い。ローマクラブの『成長の限界』の編集長。(以上、『World Shift』(ピオ・マガジン刊、2010年) 監修者代表の野中ともよ氏による巻頭のメッセージより。)

することが現実性を帯びているにもかかわらず、まるで自分には関係の無いこととして日々の楽しみにだけ興じているという、核を巡る現在の私たちの姿にも当てはまる。あるいは、自分たちの滅亡を引き起こすもの—安全性が保証されておらず未来の社会にたいして極めて無責任な原子力発電所—を推進することによって今の繁栄を享受しようとしているという、極めて近視眼的な私たちの姿にも当てはまるであろう。

またラズロは国家について、「紛争をとめるどころか危険なハイテク軍備をさらに備えようとし、愛国心や国家安全をかかげながら憎悪に満ちたナショナリズムを蔓延させている」(ラズロ2010:27-28)、と指摘する。日本の場合で言えば、国家が憎悪に満ちたナショナリズムを蔓延させているだけでなく、政府が憲法に違反する集団的自衛権を盛り込んだ安全保障関連法案を強行に採決し、日本が戦争に参加する具体的な道を作り上げようとしているかのようである。

ラズロ(2010)は、このままでは、「テロリスト集団、核拡散者、麻薬の売人、および組織暴力団は、法外な値段で兵器やドラッグを供給する為に無節操な企業と手を組み、各国の政府はテロリストを狙って彼らをかかまっているであろう国を襲撃するが、投獄されたり処刑されたりするテロリストを上回るスピードで新たなテロリストが出現する」(p.29)、と予想している。文字通り恐怖(テロ)の世界の出現である。このことももちろん正しい指摘である。しかし、このままでは、残念ながら、ラズロの予想以上の最悪な事態が生じることは明らかである。なぜなら、私たちは、生命と相容れない核をもっている世界に住んでいるからである⁴。

私たちの世界は、現在、極めて奇妙で極めて危機的な状況にある。何が奇妙かといえば、私たちの暮らしを守るための制度的枠組みであるはずの国が私たちの暮らしを破壊しようとして

いること、そして、それと同時に、多くの人たちはそれに対して危機感を有せず、利己的な功利にのみ執着しているということ、が奇妙なのである。何が危険かといえば、自分たちが制御できない怪物を生み出してしまったこと、その怪物が何らかの偶発的な出来事でいつなごき大惨事を引き起こすかも知れない状態にあること、そして、それに対して多くの人たちがその危険性を感じていないこと、が危険なのである。

では、いったい私たちはどうすればよいのであろうか。

重要なことは、まず一人ひとりが、自分が生きているこの社会の在り様にたいしてこれまでの無関心な態度を改め、当事者性をもってしっかりと向き合うことである。現在、学問と応用科学と倫理との間に大きな乖離が生じていることにより、私たちは危機的な状態にある。原子力に関して言えば、理論的な原子核物理学とそれを応用する原子核工学の技術の間に大きな乖離があり(山本2011)、私たちは原子力を制御できず、極めて危険な状態にある。また、そのことに対して国民的な議論が妨げられていることにより、あるべき倫理を生み出し得ない状況にある。現実と対峙することにより、持続可能で理に適った、公平で平和な世界を築く、あるべき倫理としての世論を導き出すことによって、政治を自分たちの手に戻すことが、私たちの喫緊の課題である。さらには、それによって、私たちは今の世界が向かいつつある未来を変えなければならない。

政治を私たち一人ひとりの手に戻し、私たちの進みゆく破滅の道を変えるためにも、一人ひとりが対等に配慮され、平和で持続可能な日常性を大切に政治を生み出す教育の在り方こそが、今、問われなければならない。

翻って、人々のかけがえのない日常性を極限までに奪った原爆、現在なお奪いつつある被爆

⁴ 生命と相容れない核については、高木(2012)、Ochiai(2014)などを参照されたい。

と被曝の諸問題を扱う原爆文学は、平和で持続可能な日常性を大切にできる未来を創出する力を私たちに与えてくれる可能性を有しているのではないだろうか。

1.2 研究の目的

本研究の目的は、現代社会にとっての原爆文学の意義を問うものである。本稿は、とくに1960年代後半以降に書かれた原爆文学の代表的作家である井上光晴を読み解くことにより、井上の原爆文学の現代社会にとっての意義と可能性を問うことに焦点を当てる。川村（2011）が、井上の『西海原子力発電所』（1986年9月）を、「本格的な“原発小説”の嚆矢」と名指している（川村2011：243）ように、井上が原爆文学と原発文学の両方を手掛けた数少ない作家の一人⁶である点において、井上が、新たな意味づけのある原爆文学を代表する作家だと考えられるからである。

とりわけ2001年12月に立ち上げられた原爆文学研究会⁷による個別の文学作品を対象とした優れた研究が多数あるものの、1960年代以降、原子力平和利用が推進される一方で、原子力に関するさまざまな事故が生じると同時に新たな

原爆文学・原発文学が生み出されたのにもかかわらず、1960年代後半以降に焦点を当てて原爆文学の現代社会にとっての意義と可能性を問う研究は十分になされていない。たとえば、原爆文学史の一人者である長岡（1973, 1977）の原爆文学史・原爆民衆史も、もちろん研究発表時期による制約はあるものの、1968年以降は扱っていない⁸。原爆や原発に関わる様々な事故が次々と起こり、命にたいする蹂躪が様々なところで具現化している現在、1960年代以降の原爆文学を再評価する作業は、私たちの未来を取り戻すうえでも重要だと思われる。

なお、長岡（1973）は、1945年～1965年頃までの原爆文学を、表1のような四つの時代区分に分けている（pp. 5-84）。これは、「出来事」あるいは「事実」の結果として原爆文学を捉えているものである。本研究の目的は、このような、「出来事あるいは事実の結果としての原爆文学」を、「政治・社会状況との相互作用としての原爆文学」として読み直し、原爆文学を未来を照射するものにとらえ直して、この表を書き直すことにある、と言い換えることも可能である。

⁵ もちろん、「何が正しい世論か」ということは、少なくない場合、相対的である可能性、あるいは文脈に依存する可能性、がある。しかし、社会的な生き物である私たち人間にとって、「持続不可能で不公平な社会をそのまま放置する世論」や「不安で不公平な社会を導く世論」よりも「持続可能で平和で安心して暮らせる社会を導く世論」のほうが正しいということは自明であろう。しかしながら、現代の社会は持続可能ではなく、また公平でもない。また、少なくとも現代の日本は、多くの人々にとって明らかに不安で生きづらい社会であろう。たとえばそれは、自殺率の高さ（2012年のWHO報告では、日本の自殺率は10万人にたいして18.5人で世界10位となっている。2014年3月12日発表の内閣府自殺対策推進室・警察庁生活安全局生活安全企画課公表資料「平成26年中における自殺の状況」によると、2014年の自殺者数は25,427人であり、10万人にたいして20.04人であった。）とその上昇傾向にも表れている。ここで「正しい世論」というのは、「現在と未来の社会を構成する一人ひとりの暮らしが対等に配慮され、平和で安心して暮らせる持続可能な社会を導くように政治を動かす国民的意思表示あるいは国民的共有論拠」を意味している。

⁶ 成田（2014）によれば、井上光晴以外に「原爆文学」と「原発文学」の双方を執筆したのは、林京子、堀場清子を除いてほとんど見当たらない（p. 346）という。講談社文芸文庫として2014年に出された『西海原子力発電所／輸送』の裏表紙には次のように述べられている。「チェルノブイリ原発事故を受け、核廃棄物輸送事故による被曝と避難生活をもたらした生活の破壊と人間の崩壊を予言した「輸送」。3.11原発事故を経験した現在から、先駆的〈核〉文学はいかに読み解かれるか。」

表1 長岡（1973）による原爆文学の四つの時代区分

時代区分	被爆を巡る時代状況	原爆文学
第一期 (1945年～1951/ 1952年)	<ul style="list-style-type: none"> 報道管制の時期（「ヒロシマ・長崎の事実は、被災時においては軍部により報道をおさえられ、敗戦直後の45年9月19日以降は、占領軍による報道管制によって、長くその実態を知らされなかった。」（長岡1977：285） 「東西冷戦の激化は昭和25（1950）年6月、朝鮮で火を噴き、その年の8月には、原爆禁止を提唱したストックホルム・アピールが全世界三億の署名を集めたのに逆行して、国内では再軍備化が進行、それに抗しようとする動きは弾圧され、地元広島でも、8.6平和集会在が群れをなす武装警官に取り囲まれるに至る。」（長岡1973：6） 「広島・長崎では、国際平和都市づくりに政治的努力が集中された結果、被爆者は置き去りの不安に怯えながら、片隅に追いやられて過ごさねばならなかった。」（長岡1973：6） 	<ul style="list-style-type: none"> 「地元文化聯盟の機関誌『中国文化』の創刊（1946年3月）から、原民喜の自死（1951年3月13日）、大田洋子が『屍の街』（1948年11月発表、完本は1950年5月刊）を発表し、『人間襤褸』（1950年8月～1951年8月）をまとめあげたころまで」（長岡1973：5） 報道管制のために「原爆がもたらした悲惨な、非人間的な事実を、広く国内世論に訴えることができなかつたばかりでなく、その間に国際的な原子力管理の好機が失われた。」（長岡1973：6）。 代表的原爆文学：原民喜『夏の花』（1947・6）、正田篠枝『さんげ』（1947・12）、大田洋子『屍の街』（1948・11）、『人間襤褸』（1950・8）、永井隆『長崎の鐘』（1949・1）、蜂谷道彦『ヒロシマ日記』（1950・7）、長田新編『原爆の子』（1951・10）
第二期 (1951/1952年～ 1955年)	<ul style="list-style-type: none"> この間被爆地では、「突然原爆症が現われ死に突き落とされるケースが後を絶たず、まず民間から、遅れて国家による被爆者医療対策が、わずかずつながら動きはじめ、また被爆者自身の手による組織づくりも端緒につき始めた。」（長岡1973：21） 	<ul style="list-style-type: none"> 「朝鮮戦争による様々な影響とからみ、原爆症（ケロイド、白血病の顕在化など）の問題が、文学の中に色濃く反映された時期」（長岡1973：5） 代表的原爆文学：峠三吉『原爆詩集』、大田洋子『半人間』（1954・3）、『夕凧の街と人と』（1954・11～1955・8）、阿川弘之『魔の遺産』（1953・7～12）
第三期 (1956年～1962年)	<ul style="list-style-type: none"> 「原水禁運動が、未曾有の国民的規模での盛り上がりを見せた時期」（長岡1973：5）。しかし、「第1回原水爆禁止世界大会に集約されてもたらされた曙光は、5年を経ずして安保・中ソ対立の渦に巻き込まれ、ふたたび閉ざされるにいたる。」（長岡1973：35） 	<ul style="list-style-type: none"> 「原水禁運動の隆盛と裏腹に、原爆文学作品は量的にも退潮し、質的にも曲がり角にきた時期」（長岡1973：5）。 「原、峠はすでに亡く、阿川は戦列を離れ、大田までが不可解な変貌を示してゆく。しかも彼らにかかわる書き手はまだ現れてこないこの時期にあって、短編だが特異な印象を残す作品に、中本たか子『死の鞭と光』（1956・5）、川上宗薫『残存者』（1956・12）がある。」（長岡1973：42）
第四期 (1962年～1967年)	<ul style="list-style-type: none"> 「昭和35（1960）年安保改定を機に原水禁運動の政党系列化が促進されてきたなかで、かろうじて統一を保持してきた日本原水協も、同38（1963）年第9回世界大会でついに分裂するに至る。」（長岡1973：60） 「昭和39（1964）年10月、中国は初の核爆発実験に成功、世界で5番目の核保有国となった。その対中国敵視路線に立つ米国は、同38（1963）年10月、ゴ・ジンジェム政権が崩壊するや、南ベトナムへの派兵を著増」（長岡1973：60） 	<ul style="list-style-type: none"> 「これまでの作品を超えようとする各種の試みがなされ、戦後20年を経て、『黒い雨』（井伏鱒二）がクローズアップされるに至る。」（長岡1973：6）

（注）長岡（1973, 1977）の記述を基に作成。とくに、長岡（1973：5-84）を参照。

1.3 原爆文学と原爆文学研究

さて、そもそも、原爆文学・原爆文学研究とは何なのであろうか。これこそ本研究の探るべき大きな課題の一つなのであるが、ここでは、これらに関する文学史上における、重要と思われる見解について若干触れておきたい。

(1) 原爆文学の定義

「原爆文学とは原爆に関する文学の総称である」とよく言われる。が、本当にそうなのであ

ろうか。また、原爆の投下とともに原爆文学が生まれたように語られることが少なくないが、文学史上においても、原爆の投下を母胎として原爆文学が産み落とされた、と理解して良いのであろうか。

『原爆文学史』をまとめた長岡 (1973) によると、原爆文学とは、「原爆投下をもたらした、あの目に見える限りにとどまらず、内部からも人間存在を蝕み脅かしてやまぬ、その事実を題材とする文学」(p.3) のことを指すという。

⁷ 原爆文学研究会は、2001年12月、日本近代文学の研究者であった花田俊典氏の呼びかけによって第1回研究会が開催され、産声を上げた。2015年10月15日現在の事務局を担当されている福岡大学の中野和典氏によると、発足当時30名だった会員は、現在約70名になっているという。本研究会のホームページに掲載された「原爆文学研究会発足の辞」には、次のように記されている。「戦後半世紀、「原爆」という「わたしたちの体験」はさまざまな形で問題化されてきましたが、いわゆる記憶の風化の問題、語り部の語り口の問題、世界的規模の核兵器削減・廃絶に関わる問題、あるいは戦争と平和論の問題など、今日なお模索すべき課題は多くあるようです。本会では、これを「文学」、あるいは「文学的」な問題として再考していきたいと考えています。思えば戦後五十年、「原爆文学研究」と銘打った雑誌は刊行されていないようです。これはどういうことなのか。文学というジャンルは、情感を盛り込むことに適した表現形式として当事者たちの有効な「記録」媒体として用いられてきましたが、同時にまた、文学はクリエイティブな言語運用の表現形式でもあります。後者の意味において、原爆「文学」は、きわめて今日的な光景の創造の場とっていいでしょう。換言すれば文学の場における「原爆」の光景は、不断の現在の産物とっていいかもしれません。これらのことを、ゆるやかに意識しつつ、幅広い視野のもとに、お互いの問題意識を交換し、自由に忌憚なく対話する場として、原爆文学研究会を発足いたします。」(<http://www.genbunken.net/goannai/goannai.htm> 2015年10月12日閲覧) また、同じくホームページに掲載された、同研究会の現在の代表世話人である長野秀樹氏が2013年6月2日に記した言葉は次のとおりである。「2001年12月、故花田俊典さんの呼びかけに集まった私たちが、原爆文学研究会の第1回研究会を開催して以来、10年以上が経過しました。私たちは、当初、会の名称が示すとおり、西日本の2つの都市にアメリカ軍によって落とされた「原子爆弾」にまつわる「文学」と「文学的」な問題を、中心的なテーマとして、研究、活動を始めました。しかし、それは決して、「題材」として限定的に「原爆」を捉えようという試みではなく、「発会の辞」に言うように「いわゆる記憶の風化の問題、語り部の語り口の問題、世界的規模の核兵器削減・廃絶に関わる問題、あるいは戦争と平和論の問題など、今日なお模索すべき課題」として、言いかえれば、現在を生きる私たちの課題として「原爆」を含む核エネルギーの問題を捉えようという試みでした。そして、2011年3月の東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故が起きました。原子爆弾・水素爆弾という(兵器)と原子力発電所という(利器)が科学技術をはじめとする様々な関係性において実は連続し、同じ脅威をもたらすものであったことを、まざまざと私たちは体験しています。そうして見ると、世界には様々な形で、核エネルギーの脅威にさらされている地域と人々があり、それと向き合う言葉や映像や芸術があります。それらを見すえたグローバルな視点を獲得するために、また、一方でヒロシマ、ナガサキ、ビキニ事件などに関わる言葉と文化をローカルな視点から研究するために、今後も会を続けて参ります。現在につながる問題として、過去を学びなおし、未来を構想するためにも、研究者だけの閉じられた言葉に陥らぬよう、常に開かれた会であり続けます。」(<http://www.genbunken.net/goannai/goannai.htm> 2015年10月12日閲覧)

⁸ 長岡弘芳は、1972年3月～1976年11月までの間に様々なところに発表したエッセイを『原爆民衆史』(1977年、未来社刊)にまとめている。その中に所収されている1975年8月5日号の読売新聞に載せた「原爆文献30年」というエッセイの中で、1966年以降1975年までの原爆文献の傾向を「①児童・教育部門の充実、②原時点の記録再発掘の進展、③大部の資料の相次ぐ刊行等々」(長岡1977:234)と総括しているものの、原爆文学としての傾向については触れていない。

長岡（1973）は、同書の別の個所で、原爆文学について、「原爆がもたらした諸悪とそれに対する人間の尊厳とを追求する文学」とも定義している（p. 155）。

長岡が原爆文学の題材と名指す「その事実」とは、原爆がもたらした人間と町の破壊や被爆によって生じた様々な身体上の症状のことだけを指しているのではないだろう。「その事実」とは、人間の条件となる人間性や人間たちの連携によって創られている社会の崩壊をも指していると考えられる。「原爆文学」とは、そのような人間性や社会の瓦解を導く驚異的な力を有するものの出現あるいは存在という「事実」の本質を問う文学と考えることができよう。少なくとも、現時点においては、原爆文学をそのようにとらえたい。

(2) 「ジャンル」としての「原爆文学」の出現

川口（2002）によると、「原爆」を語る言葉を一つの確固としたジャンルとしてそれらを「原爆文学」という領域に括っていくのは、原民喜の「夏の花」⁹、井伏鱒二の「黒い雨」¹⁰が時をほぼ同じくして高等学校国語教科書に採用され、そして『原爆文学史』¹¹という史的記述をベースとした長岡の著作が登場した1960年代後半から70年代前半のことだという。

では、一つの確固としたジャンルとしてまとめられる「原爆文学」とは何だろうか。川口

（2002）は、「原爆文学」について語ること、もしくは「原爆文学」というジャンルの成立そのものが、戦後日本というナショナルな空間の同一性の構築、脱構築、再構築といった実践と極めて深く結びついていた、と指摘する。原爆に関する文学が認定教科書という公教育制度の中で公的な承認を与えられ、国民間の共通の記憶を創り出そうとする国家的な運動の中で、「原爆文学」は確固としたジャンルとして確立したというわけである。

川口（2008）は、次のように指摘する。

興味深いのは、一九七三年に「黒い雨」（東京書籍、筑摩書房）、次いで一九七五年に「夏の花」（三省堂）と、高等学校国語教科書に採録された時期がほぼ一致することである。教科書という公的メディア、公教育制度への原爆文学の登録は、この時期にトラウマ記憶から物語記憶への変換、ある種の社会的合意形成が行われたことを示唆しよう。それを裏付けるように、一九七三年には長岡弘芳『原爆文学史』が刊行される。原爆文学研究史に輝く先駆的作品の登場は、同時にこの時点で原爆を扱うテキストを原爆文学というジャンルに包摂し、それを史的に整理、叙述する回顧的視点が確立したことを意味する。（中略）こうした原爆文学の認知、公教育制度への登録において、（中略）共同体の防衛機制が働かなかったと考えるのは楽天的に過ぎるだろう。「夏の花」や「黒い雨」は、文学的価値ゆえに教

⁹ 原民喜（1905-1951）の「夏の花」について、長岡（1973）は、次のように述べている。「昭和22年6月「三田文学」誌上に発表され、被爆当事者がその日のことを描いた、最も早い作品の一つとなった。「夏の花」は、だが、プレス・コードを慮った「近代文学」で見送られ「三田文学」に掲載されたもので、当時広く注目を集めたとは言えない。「夏の花」に限らず、それと三部作をなす「壊滅の序曲」（昭和24・1）にしろ、「廃墟から」（同22・11）にしろ当時はむしろ少数識者のもので、朝鮮戦争勃発後の昭和26年早春、原は自らの命を絶つことで、これらの作品の浸透を購ったといえよう。」（長岡1973：11）なお、「夏の花」は、1974年、高等教育国語教科書に採用された。

¹⁰ 井伏鱒二の「黒い雨」は、『新潮』に1965年1月号より同年9月号まで連載され、1966年に新潮社より単行本化された。連載当初は、物語の内容から「姪の結婚」という題名であったが、連載途中で「黒い雨」に改題されたという。1966年に第19回野間文芸賞を受賞している。1976年に高等教育国語教科書に採用された。なお、「黒い雨」は、被爆者・重松静馬の『重松日記』を下本にした作品であり、『重松日記』は、2001年に筑摩書房から刊行されている。

¹¹ 長岡弘芳の『原爆文学史』は1973年に刊行された。

材化されたのであって、原爆を題材としたからではないという見解がナイーブであることは、紅野謙介が指摘するように、「黒い雨」と同じ作者の戦争文学の傑作「遙拝隊長」が教科書に採用されなかったことを考えても明らかである。(山口2008: 15-16)

極めて鋭い指摘だと思う。だが、果たして以上の理解は本当に正しいのであろうか。本研究は、このことをも問う。筆者は、現時点では、国語教科書に採用されたことが、社会的合意形成が行われたことと直結しているとは思えない。とくに当時の日本の教科書検定に関しては、家永教科書裁判の第一次、第二次訴訟結果に象徴されるように政府の意向が色濃く反映された時期であったことを顧みるとき、社会的合意形成が行われたから教科書に採用されたのではなく、逆に、トラウマ記憶から物語記憶へと変換させようとする国家の意志がそこにあったのではないかと推測する。筆者自身は、ナショナルな空間を超えて、原爆後あるいは核後の人間そのものの在り方や人類全体の在り方を問うものこそが原爆文学ではないかと、今の時点では思われる。

ここでは、原爆文学の歴史について、長岡(1973)が次のように述べていることだけ、記しておきたい。

原爆に関する文学の歴史も、圧倒的な事実と人間の卑小さとの間を複雑に揺れ動く、ジグザグの道をたどってきた。とはいえ当時の残忍や悲惨を正視して記録し、あるいは以後の事実を執拗に追及することを通じて、人間の尊厳を示し愚かさに抗議し、後世に一抹の光明を託したいと願うゆえのその歩みは、そもそも余儀なくされ出発したのではあれ、戦後の民衆が持った新しい、一つの光栄ある系譜として位置づけられる。すなわち、そこから発するうめきと苦闘のさま、それを支える人間の優しさの足跡こそが、原爆文学の歴史にはかならない。(長岡1973: 5)

(3) 原爆文学研究とは何か

では、原爆文学研究とは何か。原爆文学研究とは、もちろん文字通り原爆文学に関する研究であるが、原爆文学研究の原爆文学研究たる所以とは何であろうか。

李(2002)は、「私」の苦痛だけではなく「他人」のそれをも問題化するのが「原爆文学」なのであり、その問題を「私」が引き受けることによってしか「原爆文学研究」は始まらない、と指摘する。李(2002)の意味するところは、自己の原爆体験だけを書いたものは、「原爆」に関する「文学」という意味で「原爆文学」かもしれないが、文学史上、「原爆文学」と名指されるものに入らない。そして、自己の苦痛と他者の苦痛との両方を当事者性をもって引き受けることによって初めて原爆文学研究が始まる、ということであろう。

当事者研究とは、たとえば被爆者、被害者、障害者、女性といったマイノリティとされる人々に属する人々だけが発する研究ではない。全ての人は自分自身の生を生きるという点において当事者であり、またはたとえば原爆投下の時日本にいた全ての住民、あるいは現在日本に住む全ての人も、原爆投下の地である日本にいた、またはそのような日本に住んでいる、という点において当事者であり、さらには、現在地球上に生きる全ての人は、この核のあるこの世界に生を受けた、という点において当事者である。

複数の当事者性をもって一つの問題を複数の視点から見ることにより、物事の問題の本質を浮き上がらせることができる。本来本質性を有さない言語によって本質を浮き上がらせる営みが文学であるのならば、原爆の本質、そして原爆投下後の現代社会の本質を、文学という手段によって明らかにするのが原爆文学であり、当事者性をもってその原爆文学からその発している物事の本質を読みとるものが、原爆文学研究であると言えよう。その意味で、本研究は原爆

文学研究の一つの試みたらんとするものである。

¹² エンターテインメント的な原発をテーマとした作品が悪い、と言っているわけではない。近年出版された、東野圭吾著『天空の蜂』（講談社、1998年）、山本元著『東京原発』（竹書房、2004年）、真山仁著『マグマ』（角川書店、2009年）など、緻密な取材のもとに正確な情報を使い原発のかかえる深刻な諸問題をわかりやすく指摘しているものも多く存在している。逆に、ウィルマー・H. シラス著・小笠原豊樹訳『アトムの子ら』（早川書房、1981年）、マーク・レイドロー著・友枝康子訳『パパの原発』（早川書房、1988年）など、エンターテインメント性を売りにしているものもある。しかし、これらは「原発小説」と言えるかも知れないが、ジャンルとしての「原発文学」に属している作品群ではない。

なお、原発推進に一役買ったと指弾されている漫画・アニメ『鉄腕アトム』については、手塚治虫の公式サイトキャラクター名鑑「アトム」の項において、「原子融合システムによる10万馬力（のちに100万馬力にパワーアップ）のロボットで科学万能主義のように思われていますが、手塚治虫がアトムに演じさせていたのは、科学と人間は本当に共存できるのだろうか？というメッセージでした」と記載されている（<http://tezukaosamu.net/jp/character/25.html> 2015年7月5日閲覧）。少なくとも、原作の漫画とテレビ放映されたアニメとは意図が異なっていることには留意が必要であろう。原作者は同じであるが、それぞれの実質上の作者である脚本家が異なるのであるから、当然と言えば当然である。アニメのアトムは、原発技術に未来を託している豊田有恒（1938-、SF作家）が脚本を提供している（『日本原発小説集』水声社、2011年の著者紹介参照）。なお、『鉄腕アトム』は1963年1月1日から1966年12月31日全193話までフジテレビで放映された後、1980年～1981年にかけて日本テレビで放映された。その後、2003年4月6日～2004年3月28日にかけて全50話で『アストロボーイ・鉄腕アトム』としてフジテレビ系列で放映された。

『東京新聞』（2013年4月17日）の「アトムの涙 手塚治虫が込めた思い〈上〉」によると、福島原子力発電所事故以来殺到しているアトムへの批判にたいし、草創期から活躍するアニメーター鈴木伸一氏は「アニメは限られた時間枠に物語を収める必要がある。協賛企業やテレビ局の意向も入れざるを得ない。作者の意図と離れて行ってしまうことがある」と答えているという。しかしながら、残念ながらこれは答えになっていないと思う。商業化されたテレビ界でのアニメ化は、巨大資本を有するスポンサーの意図に飲み込まれ利用されてしまう危険性が極めて高いことはもともと自明な事実であり、それを知らながら民間のテレビ会社にアニメ化を許可したこと自体に非が無いとは言えない。さらなる問題は、原発のPR館等で無料で配布されていた鉄腕アトムの原発PR冊子「アトムジャングルへ行く」（1977年）とその続編「よみがえるジャングルの歌声」（1978年）の存在である。これについては、『東京新聞』（2013年4月18日）の「アトムの涙 手塚治虫が込めた思い〈中〉」によると、1988年6月の才谷達氏による取材に対し、手塚は、「描いた覚えはない。許可した覚えもない」と関与を全面否定しているという。なお、『東京新聞』（2013年4月19日）の「アトムの涙 手塚治虫が込めた思い〈下〉」は、アトムは息子を亡くした天馬博士により科学技術によって創られるが、成長しないことに苛立たれてついに追い出されてしまったことに関連して、「幸福のためには必ず科学技術が、人のエゴや良く出ゆがめられてしまう。アトムはいつもそのはざまに悩んでいるんです」と手塚の娘のるみ子氏が語っている文を載せている。

アトムは、1951年4月から1952年3月にかけて『少年』（光文社）に連載された「アトム大使（Captain Atom）」という漫画がデビュー作である（<http://tezukaosamu.net/jp/character/25.html> 2015年7月7日閲覧）。一方、「原子力平和利用」の発端は、1953年末にアメリカ大統領アイゼンハワーが国連演説で表明した“Atoms for Peace”である（田中他2011：13）ので、漫画アトムの出現のほうが「原子力平和利用」という運動の発端よりも早い。なお、漫画の「アトム」とは全く関係ないが、1955年11月1日から12月12日までの6週間、読売新聞主催によって東京で開催された「原子力平和利用博覧会」で配布された35頁の『原子力平和利用の栞』の表紙には、“a t o m”と貼られた舞台の上に燦々と輝く光のツリーが飾られており、最初の「平和のための原子」という見出しが付けられた二ページには、次のような文章が説明が含まれているという（田中他2011：36）。

「原子医学が無数の人々の命を救ったことは周知のことである。原子力によって農場では食糧が増産された。商業面では、洗濯機・たばこ・自動車・塗装・プラスチック・化粧品など、家庭用品の改良のために、アトム（原子）は一生懸命はたらいてきた。……豊富な電力は冬にはビルをあたため、夏にはビルを冷房してくれる。だが、原子力はそれ以上の意味があるのだ。医者は本世紀の終わりまでには、ある種の危険な病気は完全になくなるだろうと予言する。もし、私たちが賢明であれば、原子力はすべての人に食を与え、夢想にも及ばぬ進歩をもたらすことになるだろう。」（田中他2011：36）

50年経った現在、ここで述べられたことは詭弁であること、そして、私たちが想定されていたほど賢明ではなかったこと、が証明されたというわけである。なぜなら、ある種の危険な病気は完全になくならないどころか、内部被曝による遺伝子破壊をとめることを私たちはできなかったし、被曝による白血病をなくすことはできなかった。また、すべての人に食を与え、夢想にも及ばぬ進歩をもたらすどころか、人間にはできない仕事を増やしたものの、原子力によって夢想にも及ばぬ大惨事を招いただけだったからである。

結論として、漫画の『鉄腕アトム』と原発推進との関係については、原発推進派に『鉄腕アトム』が作者の思惑と離れて、利用されてしまった、というのが実情かもしれない。

(4) 「原発文学」とは何か

では、一方、3.11以降とみに聞かれるようになった「原発文学」とは何であろうか。すでに述べたように、「原爆文学」が単に原爆を主題としている文学でないように、「原発文学」も単に原発を主題としている文学ではない。

成田 (2014) は、「原発文学」について、次のように述べている。

原子力発電所を舞台にした作品にはエンターテインメント¹²が多く、これまでジャンル化されたり、蓄積されたりすることがなされてこなかったが、野坂昭如¹³、水上勉¹⁴、井上光晴ら、原発に関連し取材した作品を書く作家たちがおり、双方の作品があらたな事態のなかで重ね合わせられ「原発文学」とされた。(成田2014: 344)

ここにおいて、「原発文学」が生まれる背景となった「あらたな事態」とは、1986年ソビエト連邦(現ウクライナ)のチェルノブイリ原子力発電所4号炉で起きた、原子力事象評価尺度において最悪のレベル7(深刻な事故)に分類された事故、2011年3月11日の東日本大震災による福島第一原子力発電所の同レベルの事故、そして核を狙ったテロや核戦争の現実性を帯び

てきた現状などを指しているのであろう。原発文学は、原子力発電所がテーマとなっている文学という意味ではない。原発文学は、原子力発電所や核のある社会の意味を科学的な知識と作家の想像力の全てを総動員して考え抜いた結果生まれた作品群を指している。そして、これらは、基本的には、核のある社会の矛盾・危険性・誤謬性・反人間性にたいする警鐘となっており、「核文学」と表してもよいものである。

なお、現在、「原発小説」の中には、原発あるいは核のある社会の本質を顕わとする作品だけでなく、原発推進派や原発・核に対して中立の立場をとっている作家によるものも存在している。もしこのような「原発小説」も「原発文学」に含まれるのだとしたら、現在、「原発文学」は、核のある社会の在り方にたいする思想の交換の場として機能している様相を呈している、ということになるかもしれない。

2. 井上光晴の代表的原爆文学作品の解読

ここでは、『日本の原爆文学』¹⁵(ほるぶ社、1983年刊)全15巻の第5巻に収録された井上光晴の5つの作品を取り上げ、井上光晴の「原爆

¹³ 野坂昭如(1930年-)は、原発に関する多くのエッセイを残しているが、原発小説としては、「乱離骨灰 鬼胎草(ランリコッパイオニバラミ)」(福武書店、1984年)がある。卵塔村に原子力発電所が出来たことを巡る物語である。なお、野坂は、1930年神奈川県鎌倉に生まれ、戦争で親と生き別れ、妹と二人で過ごした時期のことを「螢の墓」という作品にしている。1945年空襲で養父を失い、少年院にいたところを実父に引き取られたという(「野坂昭如オフィシャルサイト」www.nosakaakiyuki.com、2015年6月22日閲覧)。

¹⁴ 水上勉(1919年-2004年)は、1985年3月に故郷である福井県大飯町(現おおい町)に「若州一滴(じゃくしゅういってき)文庫」を開設した。戦時下の1943年に生後2歳で他の家に預けたものの、空襲のため行方不明となっていた息子(窪島誠一郎氏)と1977年に再会した時、誠一郎氏が劇場や美術館をもっていったことに影響されたからであったという(『文藝春秋』2013年3月特別号)。「若州一滴文庫」という名称は、おおい町大島出身の儀山善来(ぎざんぜんらい)和尚の「曹源一滴水(そうげんいってきのみず)」という思想に感銘を受けたことから、という。極貧の中で成長した水上は「一滴の水でも大切にしなければならぬ」という和尚の思想を受け継いでいるという(若州一滴文庫ホームページ <http://ittteki.jp>、2015年7月12日閲覧)。同氏は、原発問題とそれに関わる故郷の変貌について作品を数多く発表している(『飢餓海峡』(1963年)、『地の乳房』(1981年)、『故郷』(1997)など)。なお、水上は、福井県の大工・棺桶職人の家に生まれ、死体を埋める乞食谷(ごじきだん)という谷の上の、その土地の領主の薪小屋に住んでいたが、貧困から10歳頃で禅寺の小僧として就業に出された。旧制花園中学校卒業後、立命館大学文学部国文学科に入学するも生活苦のため半年で中退したという。

文学」は私たちにとってあるいは現代社会にとってどのような意味をもつか、を考察する。なお、『日本の原爆文学』第5巻には、戯曲「プルトニウムの秋」という作品も収録されているが、これは、原子力発電所をもつ町の危うさを告発した戯曲であり、井上光晴著『西海原子力発電所』（1986）の中における劇として使われてい

る。井上光晴の原爆文学を論じる別稿にて取り上げたい。

『日本の原爆文学』第5巻に収録された井上光晴の原爆文学作品は、大きく小説とエッセイとの二つに分かれている（表2）。本章においては、井上の小説について、書かれた年順に解説を試みる。

表2 井上の原爆文学作品

I. 小説（物語の時と主題）（初出年月）	
1）	「手の家」（戦後15年（1960年）頃の被爆者の状態と差別の現状）（1960年6月）
2）	「地の群れ」（戦後17年（1962年）頃を中心とした被爆者の状態と差別の現状と回顧）（1963年7月）
3）	「夏の客」（戦後20年（1965年）頃、被爆者とヒロシマが商業化された現状）（1965年10月）
4）	「母・一九六七夏」（戦後22年（1967年）頃の被爆者の状態と差別の現状）（1967年8月）
5）	「明日——一九四五年八月八日・長崎」（原爆投下の一日前の長崎における日常）（1982年1月）
II. エッセイ（初出年月）	
1）	「原子力潜水艦をむかえる基地市民の感覚」（1964年11月）
2）	「被爆者の夏一季節」（1965年7月）
3）	「生きるための夏—自分のなかの被爆者」（1965年8月）
4）	「被爆者を差別する立場」（1965年8月15日）
5）	「逆流する重たい時間」（1966年8月19日）
6）	「前科三犯」の被爆者」（1969年1月6日）
7）	「病み犬を連れた老婆—『地の群れ』の舞台」（1969年8月14日）
8）	「『70年夏』への告発」（1970年7月25日）
9）	「生者も死者も被爆者—原爆への引戻し」（1971年8月9日）

2.1 「手の家」（1960年6月）

2.1.1 発表年と時代状況

(1) 発表年

本作品は、井上光晴34歳のときの作品であり、井上にとって初の原爆作品である。

初出は、『文学界』昭和35（1960）年6月号、のち『作品集』等に収録された。ここでは、『日本の原爆文学 5 井上光晴』ほるぷ出版（1983年）所収のものを参照・引用している。

(2) 時代状況

本作品が発表された頃、世界では、米ソ間のミサイル技術向上合戦がなされていた。本作品発表の1960年の5月1日に、ソ連を偵察飛行していたアメリカのロッキードU-2偵察機が撃墜され、予定されていたパリでの米ソ首脳会談が中止となり、緩和しかけていた冷戦を復活させた。なお、この偵察機は、前年まで厚木基地に配備されていたものだった。

¹⁵ 『日本の原爆文学』は、中野孝次・小田実・伊藤成彦・小中陽太郎・大江健三郎・長岡弘芳・黒古一夫・栗原貞子・岩崎清一郎・山田かん・鎌田定夫、以上11名を編集世話人とする「核戦争の危機を訴える文学者の声明」署名者の企画により、1983年8月に全15巻が世に出された。

日本では、同年、1月19日に日米相互協力及び安全保障条約（新安保条約）が調印された。1月27日には、ソ連が新安保条約を非難し、外国軍隊が日本から撤退しない限り、齒舞・色丹は引き渡さないことを対日覚書により通告してきた。同年6月19日、新安保条約は自然成立した。また、日本は、同年7月19日に池田内閣（～1964年11月9日）が発足し、所得倍増計画の下、高度経済成長期に突入した。

原子力関連では、同年2月13日、当時フランスの植民地であったアルジェリア（1962年独立）のサハラ砂漠でフランスが初の原爆実験を行い、フランスは、アメリカ、ソ連（現在、ロシア）、イギリスに続き、第四の核保有国となっている。

2.1.2 内容

(1) 概要

舞台は、戦後15年ほど経った長崎の孤島にある切丸（きりまる）部落。そこにある「手の家」¹⁶という名の孤児院で育てられた4人の娘たちを中心とする、部落の様子のお話である。戦後の混乱からの覚醒の時期における、人々の複雑な差別意識を描写している。

(2) 物語

「手の家」に、戦後1年くらい経って、小学校（当時は国民学校初等科）卒業したばかり（12歳）と思われる重乃（しげの）と5、6歳の整子、りえ、順子の4人の被爆孤児が、長崎から海を渡ってやってきた。現在、重乃は20代後半、整子、りえ、順子は、20歳か21歳くらいになっている。重乃と整子は結婚している。しかし、重乃の一人目の子どもは4歳で死亡し、二人目の子どもは生後11日目ではやはり死んでしまっていた。

物語は、整子が初めての子どもを身ごもったが、妊娠三カ月での流産後10日経っても出血が止まらなくなっているところから始まる。そのようなとき、切丸部落で小学校教師をしている輪島輝秀（てるひで）の伯父・輪島初馬（はつま）が、輝秀の婚約者であるりえを見に島原から船で切丸部落にやってくる。しかし輝秀がちょうどりえを初馬に引き合わせているところへ、りえが働かせてもらっている切丸寛之のところの娘・里子が、整子が危ないことを告げに来た。整子と一緒に育ったりえが整子の死に間に合わなくなるといけないと思ったからだ。整子のところへかけつけたりえに整子は、「重乃さんのこともうちのこともいってはならんよ」と殆ど聞き取れないくらいの声で口を動かしながら息を引き取る。

葬式が一段落したとき、切丸窯の細工人の国定（くにさだ）が皆の前で切丸寛之に懇願する。「長崎から手の家を再建しにみえられることはなんとかきつくとやめにしてもらおうようにすることはできませんよるか、旦那様。そうしないと子供たちがまた大勢つれてこられて、たった4人でもあんな子供が育たんとか、血のとまらんとかいう騒動がおきとりますとに、この上つれてこられたら、本当にエタ部落のごとなつて、よその村から嫁の貰い手のなかごととなつてみなもいよりも」「やっぱり隠れは隠れのしきたりを守っていかんと、ごういことになるとじゃなかとでしょうか、もう順子は嫁にいけんという噂までながれよりもつから、本人たちがかわいそうです。もしまた手の家ができて、長崎から親がピカドンでやられた子供たちがぞろぞろ入つてくると、順子だけが嫁にいけん位ではすまんことになります。切丸部落は血が止まらん、という噂でたらもうそれでエタとおなじことになりますけん、誰も嫁にいかれんし嫁

¹⁶ イタリアの北部の山脈の中にあるカトリックの集団施設「手の家」から名前が付けられた。そこにも切丸部落と同じように窯があり、神父と信者たちが壺や皿を焼いているという（井上1983：23）。

にもとれん」と。

2.1.3 要点

本作品は、被爆が引き起こした悲劇を通して、日本社会の中に複雑に存在する非近代性をあぶり出していると読むことが可能である。

(1) 非合理的思考に覆われた世界

まず、日本社会の非近代性は、科学的な思考の欠如であり、説明のつかない現象を神による罰＝穢れと見做し、それを忌避する態度にある。それは、葬式の後の細工人・国定の発言「やっぱり隠れは隠れのしきたりを守っていかんと、ごういうことになるんじゃないかとでしようか」に象徴されている。他にも、似たような表現として、次のような発言が住民から出ている。

「ありゃピカドンにかかったせいばかりじゃない。隠れにそむいた罰だと…」(井上1960=1983:21)

(2) 身分制をルーツとする差別意識

日本社会におけるもう一つの非近代性は、日本において支配のための政策として使用された身分制を核とする差別意識である。なお、身分制は、人間の自己保存ならびに種の保存の戦略として人間の意識構造に組み込まれた差別意識を利用したものと考えることができる。

また、穢れにたいする差別は、重層構造・拡張性をもっている。整子の葬式が始まる前に訪ねてきた輝秀はりえにつきのように言っている。

「伯父さんに誰がいうたのかしらんが手の家のことはしれたぞ、困ったことになった、だましたことはあやまってしまえばまあそれでいいが、うちのへんでは長崎の町からというだけで嫁にはもらわんとだからねえ。」(井上1960=1983:23)

つまり、差別は原爆症を発症している人たちだけではなく、被爆した可能性があると思定さ

れる人にまで及ぼされるというのである。それと同様に、差別対象者がいる地域全体が差別の対象となってしまうということにも拡大適用される。それは、やはり国定の次の言葉に象徴されている。

「たった4人でもあんな子供が育たんとか、血のとまらんとかいう騒動がおきとりますとに、この上つれてこられたら、本当にエタ部落のごとなつて、よその村から嫁の貰い手のなかごとなつとみなもいよります」(井上1960=1983:29)

本小説の冒頭にも、次のような言説を載せている。

「長崎のピカドンでやられた家の娘は年頃になつても嫁にいかれんよ。長崎から移つてきた孤児や、人々のことをみんなとまらん部落のもん、とまらん部落のもんよんどるけんねえ。とまらんとは血のとまらんことたい。あそこの部落のものはエタと同じじゃというて、みんな嫁にもいけん」(長崎県西彼杵郡××村の女の話)(井上1960=1983:10)

つまり、部落の数人が差別対象者になった場合、部落全体が差別の対象となってしまうというのである。

(3) 家制度をルーツとする女性蔑視

日本社会のさらなる非近代性は、女性蔑視である。被爆女性にたいする蔑視は、子孫を残せない女性を非人間とする感情であり、それは、女性を「産む性」としてしか見ない日本における家制度に秘められた感情でもある。親雄は母一人、子一人だったが、そのことに関し、重乃は、夫の十郎が次のようなことを口にする場面を思い出している。

うちはあきらめとるが親雄のとはどうするつもりじゃろうかね、親一人子一人の親雄に子どもが生れんとこりあ困ることになるぞと、い

つか良人の十郎がいったことを重乃は脳裡に浮かべた。子が育たんのは淋しいがおれは兄弟も多いし、あきらめればそれですむ。しかし親雄のところはそうはいかんで、今日も窯取りするときにあの毫碌七のやつがいうとった。…(中略)…とその時、十郎は舌打ちして彼女にいったのだ。(1960=1983:15)

また、嫁の整子が亡くなると、親雄の母いねは、「手の家のもんはもう嫁にはなれんぞ」と突然喚き(井上1960=1983:27)、「手の家の女がきてから不幸なことばかりじゃった。親雄が可哀想じゃ」(井上1960=1983:27-28)と嘆く。また、重乃、りえ、順子が通夜のために残るように切丸寛之に言われているのを聞くと、親雄の母は、「いやぞ、手の家のもんはうちで通夜はさせん」(井上1960=1983:28)と喚き、「手の家のものが残るなら、おれは家にはおらん。ああ親雄が可哀想じゃ」(井上1960=1983:28)と声をあげて泣き出している。女性自身が女性を貶めていることが表現されている。

(4) 個の自立の未熟性

日本の非近代性の四つ目は、個の自立の未熟性にある。それは、家制度の名残り近代における恋愛との不整合性と言ってもよいであろう。輝秀は、個人の恋愛に基づいて結婚を決意するものの、いざ結婚する段階になったとき、親族の意向には背けないことを露呈させている。

2.1.4 「手の家」の意義

「手の家」においては、戦前からあった差別が原爆によってさらに重層化し、個人もその中から抜け出すことができない状態が描写されている。

1956年7月に『経済白書』が、「日本経済の成長と近代化」という副題のもとに発表され、その結語には、第二次世界大戦後の日本の復興が終了したことを指して「もはや「戦後」ではな

い」と記述されたが、「手の家」は、被爆が非近代的な日本社会の文脈の中に吸収され、日本はもはや戦後ではない新しい次元に突入したどころか、戦前の日本の社会のあり方が原爆によって強化され表れた状態を表現していると言える。

2.2 「地の群れ」(1963年7月)

2.2.1 発表年と時代状況

(1) 発表年

初出は、『文芸』昭和38(1963)年7月号であり、同年9月に単行本化された。なお、本稿では、河出書房新社(1992年)所収のものを参照・引用している。

(2) 時代状況

世界では、本作品が出された1963年8月28日、公民権運動家で牧師のマーティン・ルーサー・キング・ジュニア氏らが中心となり、人種差別撤廃を求める運動の一環としてワシントンで20万人規模のデモである「ワシントン大行進」(The Great March on Washington)をおこなった。同年11月22日に、米国ダラスにおいてケネディ大統領暗殺事件が起こっている。

日本では、池田内閣成立後の高度経済成長に突入した。この年の1月1日、テレビアニメ第1号として『鉄腕アトム』が放映開始となった。5月1日、部落出身であるという理由で男性が容疑者とされた狭山事件が起こっている。2月16日、熊本大学水俣病研究班が、新窒素工場の廃液が水俣病の原因と判定した。7月26日、経済協力開発機構理事会が日本の加盟を承認した。8月15日に、初の政府主催の全国戦没者追悼式が開かれ、以後毎年8月15日に開催されるようになった。西ドイツのグリュネンタール社が開発・販売した催眠鎮静薬サリドマイドが日本においてつわりの症状緩和のために使われたところ、奇形の子どもが生まれたため、薬害「サリドマイド禍」として社会不安を引き起こした。

原子力関係では、世界では、同年4月10日、米国の原子力潜水艦スレッシャー号がマサチューセッツ州の東沖350kmを潜航中、突然原因不明の破壊音とともに電子炉が停止して沈没し、乗員計129名全員が死亡するという事件が起きている。

日本では、この年の8月17日、日本原子力船開発事業団が発足した。また、10月26日、日本で最初の電子力発電が、東海村に建設された原研（現日本原子力研究開発機構）の動力試験炉で行われ、10月26日が原子力の日と命名された。東京電力は同年2月に、1971年度までの8年間にわたる電力長期計画を定め、その中間の1966年度に原子力発電所の建設をすることを発表している。

2.2.2 内容

(1) 概要

長編作品「地の群れ」は短編作品「手の家」の後編に位置づけられる作品であり、「手の家」の中に包含されたテーマは、「地の群れ」の中で炸裂する。「手の家」は、地の群れの一握りの人々を描写したが、「地の群れ」には、底辺にいる人が形相を変えて、これでもか、これでもか、というように現れてくる。

舞台は、長崎の被爆町域にある戦前からの部落とその近くで被爆者が群れ住む海塔新田¹⁷という戦後にできた部落。その二つ部落における人々の日常。戦後17年の1962年頃の長崎の被爆

者の様子を中心に、実は戦前から受け継がれる、虐げられた者たちが虐げ合うという、ごく日常的な営みが被爆を契機に増幅する様を記録することにより、現代社会のもつ構造的歪みを明らかにしている。

なお、本作品は、被曝¹⁸の影響に関するデータを確かな資料に基づいて提供することにより、原爆投下そのものの悲劇だけでなく被曝の生物学的・社会学的意味を読者に知らせる啓蒙の書ともなっている。

(2) 物語

中年のアルコール中毒の医師・宇南親雄と彼を巡る人々を中心とする物語であるが、幾つもの物語が、入れ替わり立ち替わり主人公を変えながら重畳的に折り重なって物語が展開する。

現在、親雄は長崎で診療所を開いている。痴呆が始まった母親と姉さん女房の映子との3人暮らし。子どもはいない。太平洋戦争勃発直前の頃（親雄16歳）の出来事、原爆投下直後の長崎の様子（親雄二十歳頃）、被曝の影響、親雄の共産党時代（親雄20歳過ぎ）のこと等々、過去の出来事が、目前に繰り広げられる現実と交差し、重ね合わされる。

物語は、およそ20年前、親雄が太平洋戦争勃発の4か月前の数え年16歳の夏の出来事の回想から始まる。親雄は、高等小学校1年生（10歳）の時の同級生であった朝鮮人の娘・朱宝子を強姦し妊娠させるが、宝子は、親雄がその責任を

¹⁷ 井上のエッセイ「病み犬を連れた老婆—『地の群れ』の舞台」は、副題にもあるように、『地の群れ』の舞台について述べたものである。「ごみの焼却場があるだけで、当時はあまり住み家さえなかった埋立地の大塔新田（佐世保市）を背景に選び、被爆者の部落である架空の海塔新田を胸に秘めている私は、主人公の医師・宇南親雄の診療所を、ためらうことなくこの干尺（ひづくし）海岸に決定したのである」（井上1969=1983：303）と述べている。「海塔」とは、「海の墓」という意味であるが、当初は、「ゴミ捨て場」を意味していたと推測できる。なお、台座の上に卵型の塔身を載せたことから、禅宗の僧侶の墓は「卵塔」と呼ばれたが、やがて「卵塔」は墓を意味するようになった。野坂昭如の原発小説「乱離骨灰鬼胎草」（1984年、福武書店）の舞台は、卵塔村（「墓村」という意味になる。）と名付けられている。いずれも穢れを意味するような気がする。

¹⁸ 井上は、原子爆弾で犠牲になった「被爆」（原爆の被災）だけでなく、放射線「被曝」の影響にスポットライトを当てている。

とらなかつたために自死してしまう。時代が下って共産党時代、親雄が故意に死なせたのではないが、一緒に洪水被害の地域を救援にしている間に友人を死なせてしまう。現在の妻の映子は、亡くなったその友人の恋人であった。親雄と映子の結婚後、親雄は映子に4度も人工中絶をさせているが、その他に流産する薬をこっそり入れた飲み物を映子に飲ませる¹⁹などにより、自分と映子の間にできた子どもの流産を執拗に図る。

親雄のところへ豚の臓物を売りに来た老婆・津山金代は、孫の津山信夫について親雄の母に話す。信夫は、中学校を卒業後工場に勤め始めた頃、被爆したマリア像を盗んで粉々にしてしまうという事件を起こしてしまったのだ。その頃、被爆した浦上天主堂が壊されることになり、信夫はマリア像も一緒に壊されてしまうと思ひ込み、母の顔に似た被爆したマリア像を盗み出した。信夫は、盗んだマリア像を海に投げ入れていつまでの海の中に漂わせるつもりでいたのだが、偶然が重なって突如の怒りと恐怖心から破壊してしまう。マリア像を運んでいる途中、犬が突然飛び出してきたせいでマリア像を落としてしまったところ、ケロイド状になっているマリア像の顔が月に照らされて薄気味の悪い白い光を放つたために、とらえようのない怒りと不気味な恐怖からマリア像を粉々にしてしまったのだ。

親雄のところへ、血の止まらない娘・安子を診てもらいに来た家弓光子。光子は娘が「原爆症」と診断されることを断固と拒み、長崎に原爆が投下されたとき自分は長崎にいなかったと

必死に訴える。

海塔新田に住む被爆者の男に強姦された福地徳子は、その証明書を作成を親雄に頼むが、親雄から断られたために、その男と話を付けようと一人で海塔新田に行く。娘の徳子連れ戻しに海塔新田に行った松子は、「あらぬこと」を吐いたために海塔新田の人たちに石を投げつけられて命を落としてしまう。松子は、娘を強姦した男の父・重夫に「部落のもんはどこか違う」と言われ逆上し、次のように言ってしまったのだった。

「部落のもん……そいじゃ、部落のもん知ってって娘を疵ものにしたとたいねえ…(中略)あんたは、この海塔新田が世間でなんといわれとるか知るととね。知らんことはなからう。あたし達がエタなら、あんた達は血の止まんエタたいね。あたし達の部落の血はどこも変わらんけど、あんた達の血は中身から腐って、これから何代も何代もつづいていくとよ。ピカドン部落のもんといわれて嫁にも行けん、嫁もとれん、しまいには、しまいには……」と。その言葉に怒った海塔新田の人たちが投げつける石がこめかみに当たり、松子は息を絶えたのだった。

2.3.3 要点

(1) 未解決のままの問題と新しい問題の重層化

本作品は、戦前・戦中・戦後の問題の凝縮的描写とそれらが未解決のまま社会の流れの中で忘れ去られ、置き忘れ、意識の片隅へと追いやられていったこと、そして新しい問題が足音も立てずに紛れ込んできている状態の描写である。

¹⁹ これはもちろん犯罪である。刑法では、同意や囑託であっても墮胎罪が規定されているが、215条に、女性の同意を得ずに墮胎させる行為に対し、懲役6月以上7年以下の法定刑(不同意墮胎罪)が定められている。ただ、適用は極めて異例で、1998年には秋田県警が殺鼠剤入りのワインを交際女性に飲ませたとする不同意墮胎未遂容疑で男性教諭を逮捕したが、秋田地検では起訴猶予処分とした。その後、2010年5月、大学病院に勤務していた医師の男が結婚女性とは別に交際していた女性の妊娠を知り、ビタミン剤と偽って子宮収縮作用のある薬剤を服用させた上、陣痛誘発剤を点滴して墮胎させたとして逮捕され、6月に起訴された。東京地裁は8月、医師に懲役3年、執行猶予5年を言い渡した。(時事通信社2011:223) 宇南親雄も、子宮収縮作用のある薬剤や陣痛誘発剤を妻の映子に飲ませた可能性がある。

未解決の問題は、炭鉱労働、共産党組織、被爆者・朝鮮人・女性・部落差別、宗教意識の間の対立、ダム・国土開発などである。一方、新しい問題は、放射線被曝、認知症、高齢者介護、基地、中絶・生命倫理、医師の人間性などである。

(2) 原爆投下にたいする糾弾

また、原爆投下の非人間性（原爆が絶対悪であることの一つの大きな根拠）と放射線の危険性が未来永劫に続くこと（原爆が絶対悪であることのもう一つの大きな根拠）を明らかにすると同時に、人は過去と未来を背負って生きている社会的・生物学的存在であることを現前化している。

本作品の中で、1956年のイギリス医学研究会議で行われた W. L. ラッセル博士 (W. L. Russell) の報告を引用し、被曝の影響が未来永劫と子孫へと受け継がれていく事実について次のことを読者に知らせている。

「これらの成績〔廿日ネズミについての照射研究〕は、次のように結論することができる。すなわち、人間でも、父親の放射線被曝後長い時がたって受胎した子孫は、被曝後、二、三週間で受胎したものと同様に、誘発された突然変異を受けつぐ、ということを示唆する。(中略) もちろん、卵巣を照射された女性の場合も、女性は生れたときから生涯に排卵すべき卵をもっているから条件は男性と全く同様である」(井上1963=1992a: 126-127)

さらに、日本における原子爆弾爆発後の「医学的な影響」を調査した、同じく1956年の合衆国全国研究会議の原子爆弾災害委員会の報告には、次のように書かれているという。

「子宮内で、または10歳までの小児として原爆に被曝した4400人の研究によっては、33例の小頭症—そのうち15例に知能の発育遅延が伴っている—と19例の白血病が示された。爆発中心

地点から1800メートル以内で被曝した現在16歳から19歳までの人たちの間には、軽度の視力障害の例もいくつかあった。胎内生活の前半期に落下中心から約1200メートル以内においてヒロシマで被曝した4歳半の子どもたち205人の観察は、中枢神経系の欠陥が起こされたことを示している」(井上1963=1992a: 127)

(3) 加害者と被害者の無限のループ

本作品においては、人々は被害者であるがゆえに他者にたいする加害者になることによって自らの生の意味を獲得しようとするが、それによって自らの生を貶しめるという因果が描写されている。

たとえば、自らが被爆者であることを隠すことによって娘を差別から防御しようとしたがために、原爆症による大量出血により娘を死に至らしめてしまう〔と読者は予想させられる〕母親も、被害者でありながら加害者となり、それによって自らが苦しむこととなる、と読者は予想させられる。

なお、母親の行為はもちろん娘をかばう行為であったが、本当にかばっていたのは自分自身であった可能性もある。つまり、母親の意識は、娘が原爆症とされることを娘のためにも避けたいと思っていたが、娘が原爆症とされることは自分自身が被爆していることを認めることであり、母親の無意識は、後者を避けたいと思っていた可能性がある。本件は、意識と無意識との葛藤における無意識の勝利（フロイト的心理構造）と解釈できるかもしれない。

(4) 歴史の再現性

その記憶の絶えなる更新と歴史の流れを反転させようとする絶えなる努力が無い限り、絶えず同類のことが繰り返されるという因果も表現されている。

たとえば、先にも紹介したように、主人公の一人である宇南親雄は、若い頃、朝鮮人を強姦

し、妊娠させている。親雄が責任をとらなかつたために彼女は自死によって問題を解決したが、親雄は実は彼女が死んでくれたことに安堵していた。親雄が医者になった今、強制妊娠中絶をする力を有した彼は、妻のおなかの中に宿る自分の子どもを何度も執拗に流産させることにより、自分の若いころの過ちを帳消しにしようとしているかのようである。しかし、そのことによって、彼が自分の妻に妊娠させる行為は、子どもを授かるための行為ではなく、強姦になってしまっている。

親雄にとって、自分の若い頃の過ちを消し去るための強制流産は、妊娠した事実を無くすと同時に妊婦の命は救うという、できればなかったことにしたい過去のやり直しの儀式となっているが、妻の映子にとって、子どもを産ませてもらえないのに何度も妊娠させられ、そのたびに強制的に流産させられてしまうというのは、強姦以外の何ものでもないであろう。親雄は、無反省に自分の力を使い過去の過ちを消す儀式をすることにより、過去の過ちを再現前化させ、歴史を繰り返させているのである。

2.2.4 「地の群れ」の意味と意義

そもそも、「地の群れ」とは何なのだろうか。

もちろん、「地」とは「天」にたいする「地」であり、字義的にも、「地の群れ」は底辺の人々を指すと理解することが可能である。

本作品において、筑後川上流黒谷部落の救援工作にでかけて栄養失調となり命を落とした森次庄治について、森次の元恋人・現在の自分の妻・映子に宇南親雄は次のようなことを言う。

「何も二カ月や三カ月で、この地の底に這っているような部落を掘り起こせるはずがないんだ。洪水で畑にくいこんだ石を泥虫みたいになって取り除いても、その畑の主からは玉子ひとつもらえずに、泥水みたいに死んでしまっ…」
(井上1963=1992: 171-172)

この九州大洪水は、矢部川・筑後川の電源開発計画の強行、水利工事の遅延、5年前（昭和23（1948）年）の台風被害の処置さえないされていなかったという、全て政府の施策の破綻が昭和28（1953）年6月25日から降り続く豪雨と重なり、その被害は関東大震災時のものと匹敵する事態となったものである。若き親雄らが救援工作をした部落は、実際に洪水によって文字通り水の底という地の底に這っているような部落なのではあるが、洪水は政治の破綻を表象しており、「地の群れ」というのは、政治の失敗、政策の破綻によって社会の底辺に押しやられて生きる人々を指しているとも解釈することができる。

アガンベン(2001)は、現代の生権力は、人々を生かすのではなく、人の状態を様々に分割して生き残らせるということに力点があると主張したが、「地の群れ」とは、社会によって分割され、政治によって地へと落とされ（失策と棄民）、さらに自ら自身を分断することによって、地の地まで落ちた階級であり、それは、意味もなく死ぬしかほかない、あるいは生きのまま殺されているショアの犠牲者と同じ地平にいる人々であるとも言えよう。

なお、1946年3月に広島で創刊された『中国文化』の創刊号（原子爆弾特輯）に載せられた栗原貞子の絶唱「生ましめん哉（かな）」は、原爆の負傷者たちが群れ重なり血の匂いと死臭の漂う地獄の底のような地下室の底での命の輝きを歌い上げたものであるが、「地の群れ」はこのような地下室の底から這い出てきた、原爆で身体的にも精神的にも大きな傷を負いながらも他者の命を引き継ぐものとして生き残った人々を指しているようにも思える。今現在、ヒロシマ、ナガサキ、そしてフクシマを超えて生きている私たちは、まさしくそのような存在なのではないだろうか。

それと同時に、「地の群れ」には、真の人間の在り方も含蓄されている。聖書の世界では人

間は土で作られたとされるが、聖書的世界観でなくとも、一般に地とは、人間が生まれ出ずる母胎かつ死者が帰っていく世界であり、「地の群れ」は、土から生まれ、集団となって生きていかなければならない人間そのもの、一般民衆全体、を指すと理解することも可能である。それは、生きることだけにしがみついで生きるのではなく、死を見つめて生きるべき人間である。

2.2.5 「荒野」と「切羽」に秘められた思い

井上には、荒野（あれの：1961年2月生）と6歳年下の切羽（きりは：1966年12月生）という二人の娘がいる。余談と思われてしまうかもしれないが、この「荒野」と「切羽」という名前には、「地」にたいする井上の思いが込められているように思われるので、ここで言及しておきたい。

姉の荒野は、言わずと知れた直木賞作家の井上荒野であるが、荒野は、自分の名前について次のような文を書いている。

私の名前「荒野（あれの）」は本名である。

それを知ると、たいていの人とはびっくりする。そうして、うっかり「すごいですねえ」と口走ってしまう。

礼儀正しく「いいお名前ですね」と言ってくる人も、必ず次に「誰がつけたんですか」「どういう意味があるんでしょう」と聞いてくる。

名前をつけたのは父だ。どういう意味か、と聞かれれば、「文字通りの意味でしょう」と答えるしかない。

どういう意味か、と聞く人は、実際は「どういふつもりだ」と聞いているような気もするが、それは私も父に聞きたいところだ。

（中略）

しかし、この名前の最大の弊害は「平凡な人生が合わない」ということだろう。

そして、それこそが父がこの名前にこめた願いであったに違いない。

（井上荒野2005：119-120）

しかし、筆者の解釈は異なる。

「荒野」という言葉は、「地の群れ」には一度だけ出てくる。原爆によって焦土と化した「死体だらけ荒野」（井上1992a：153）という表現である。ここでは、原爆によって町ごとなくなった状態からして「こうや」と読むのが適切だと思う。が、しかし、「あれの」と井上は読んでいるかもしれない。「あれの」には特別な意味があるからである。

「荒野」は、「あらの」「こうや」と読んだ場合、単に「荒れた野」「殺伐とした地」という意味になるであろうが、「あれの」と読んだ場合、特別の意味があるように感じられる。たとえば、「あれの」と読んだ場合、イエスが悪魔の誘惑に打ち勝った地「荒れ野」を思い起こすことも可能である。それは、自己の極限状態と闘い、自らの中にある悪魔と闘い、自らを見出す試練の場である。私たちが生きている地上とは、本来そのような場なのかもしれない。

いずれにせよ、「荒野」という言葉には、これから全てが始まるとともに私たちが絶えず挽き戻されるゼロの地点であり、なおかつ、これからの未来を決定する試練の場でもあることが含意されているように思われる。

一方、切羽（きりは）という言葉も『地の群れ』に一度だけ出てくる（井上1963=1992a：110）。炭鉱や鉱山において採掘や坑道掘進する鉱内の現場や掘進方向における掘削面を指す言葉として、である。

井上荒野は、直木賞受賞作品『切羽へ』（2010年）の中で、「切羽」について次のように記している。

「トンネルを掘っていくいちばん先を、切羽と言うとよ。トンネルが繋がってしまえば、切羽はなくなってしまうとばってん、掘り続けている間は、いつも、一番先が、切羽」（井上荒野2010：195）

前衛の場、革命を推進する場、それが切羽である。しかし、切羽は、繋がってしまえば無く

なってしまうのではない。それは、新しい未来へと止揚するのである。

井上荒野 (2005) は、父・井上光晴の小説家としての在り方を次のように表現している。

自らの「ぎりぎりの状況を逆転して前にすすむために、小説を書くしかなかった」父は、その後ずっと、この世界の「ぎりぎりの状況を逆転して前にすすむために」書き続けた。父はいつでもこの世界の未来を変えたがっていた。(井上2005: 136)

「ぎりぎりの状況を逆転して前に進む場」、「世界の未来を変える前進の場」、これこそが井上にとっての「切羽」の意味である。「切羽」という言葉も、新しい未来を切り開いていく場の意味を確かに内包している。

「荒野」と「切羽」、いずれも「地」に囚んだ言葉であるが、両方とも、未来を作り上げる土壌となる場という意味を含んでいる言葉だと考えることができよう²⁰。それは、やがていつか無くなってしまうものではなく、新しい世界へと止揚する場であり、試練の場である。それは、私たちが今現在生きている場なのである。

2.2.6 マリア像の破壊の意味

最後に、津山信夫がマリア像を偶然が重なって突如の怒りと恐怖心から破壊してしまったことの意味について考えておきたい。

アメリカによる日本への原爆投下は、これ以上の被害を防ぎ、戦争を出来る限り早期に終結させるための手段であったとして、アメリカにおいては正当化されている。だが、日本は、帰りの燃料さえ惜しんで生身の人間を載せた爆撃機をアメリカ軍の戦闘機や戦闘船に投下するという作戦に出るほど、破れかぶれの状態であったことは明らかであり、遠くない時点で日本が第二次世界大戦において負けることは目に見え

ていた。戦争を終わらせるために原爆ほどの威力のある爆撃は明らかに不要であったことにおいて、それは正当防衛の域を遥かに超え、原爆を落とした国に非があると断定せざるを得ないであろう。

それでも二種類の原爆が次々に日本に落とされたのは、日本が実験材料にされたためであったことは明らかであろう。だが、原爆の実験材料の相手たりえるためには、日本にたいする怒りと恐怖心がある必要があるように思える。何ら憎しみもなく、何万人、何十万人という、生きている人間を一瞬のうちに消え去り、燃やし、半殺しにし、皮膚をただれさすなどということはできないだろうからである。単なる怒りや恐怖心による攻撃だとしたら、これも、正当防衛による攻撃とは言えない。なぜなら怒りや恐怖心は自ら創り出すものであり、正当な根拠とは成り得ないからである。

アメリカによる原爆投下が実験のためであったか否かを問わず、明らかに正当防衛の域を超え、過剰な攻撃であると言わざるを得ない。それは津山信夫がマリア像を破壊したのと同じであり、マリア像には非がなく、破壊した津山のみ非があるのと同じなのである。

2.3 「夏の客」(1965年10月)

2.3.1 発表年と時代状況

(1) 発表年

初出は、『潮』1965年10月号である。のち1966年『幻影なき虚構』(勁草書房)に収録された。ここでは、『日本の原爆文学 5 井上光晴』ほるぷ出版 (1983年) 所収のものを参照している。

(2) 時代状況

世界では、アメリカとソ連は、この頃、宇宙開発競争を繰り広げている。3月18日、ソ連の

²⁰ なお、1991年2月2日、野間宏の死去に際し、井上は、追悼文「地の翼よ永遠に」を『朝日新聞』夕刊に発表するとともに、『群像』『海燕』にも追悼文を寄せている。「地の翼」とは、「民衆を奮い起すもの」等の意味なのだろうか。確認しておきたい。

二人乗り宇宙船「ウォスホート2号」が打ち上げられ、宇宙飛行士が人類初の宇宙遊泳に成功（約10分）。6月4日、アメリカの宇宙船ジェミニ4号が打ち上げられ、宇宙飛行士約20分の宇宙遊泳に成功、続いて8月21日ジェミニ5号が打ち上げられ8日間（190時間55分）の長時間飛行に成功。12月4日には、アメリカはジェミニ7号を打ち上げ、約14日の長時間飛行とジェミニ6号とのランデブーに成功した。本作品が世に出た1965年の2月7日、アメリカがベトナム戦争で北爆を開始。11月9日フィリピンでマルコス大統領が当選。11月10日には、中国で文化大革命が始まっている。

日本では、2月1日、原水協から社会党・総評系が分裂し、原水爆禁止日本国民会議（原水禁）が結成された。4月24日、小田実らが、アメリカの北爆に反対し、「ベトナムに平和を！市民・文化団体連合」（ベ平連）を結成した。3月2日、政府は「総合エネルギー調査会設置法案」を決定した。6月1日、筑豊炭田で山野（やまの）炭鉱ガス爆発が起こり、237人が死亡し、279人が重軽傷を負った。6月6日、日本サッカーリーグが開幕している。6月12日、家長三郎氏が、自身の教科書にたいする検定が違憲であるとして提訴している。11月19日、財政処理のために国債発行を閣議が決定し、戦後初の赤字国債の発行となった。12月10日、国連憲章改正により増設された安保理事会非常任理事国に日本が当選した。

原子力関連については、アメリカによる世界各国への原子炉の売り込みが盛んとなり、世界各国でも研究炉の運転が開始されている。1月2日、インド、トロンベイ・プルトニウム抽出工場を操業開始し、3月18日、南アフリカ共和国第1号原子炉 Safari-1（研究用）が臨界に達し、3月22日、南米コロンビアが研究炉（10kW）の運転を開始した。なお、2月3日には、アメリカのビーチボトム発電炉で火災発生の事故が起こっている。

日本では、1964年にジュネーブで開かれた原子力平和利用国際会議において各国における新型転換炉と高速増殖炉の開発の進展ぶりが明らかにされ、その前年1963年に発足したばかりの動力炉開発懇談会は、それを受け、日本においては新型転換炉と高速増殖炉を並行して開発することを決定している。1965年5月に原子力発電の東海発電所が臨界に達し、11月1日に初発電に成功し、翌年、営業運転に入った。1965年7月29日は日本原子力普及センターが発足し、9月21～28日に第9回 IAEA（国際原子力機関）総会が東京で開催された。

2.3.2 内容

舞台は戦後20年のヒロシマである。「夏の客」とは、8月6日にヒロシマ以外のところからヒロシマにやってきて、被爆者の女を買う人々のこと。内容は、8月6日に広島以外のところからヒロシマに来た旅行者と底辺で暮らす被爆した人々との出会いと会話である。胎内被曝した娘が売春行為をしたことにたいして「女郎になってしまえ」と罵る、自分自身が女郎である母親、被爆者を夏の客に紹介する女、などが出てくる。

2.3.3 要点

本作品の要点は、次の三点を挙げられる。

一つは、戦後20年経ち、資本主義の進展による全てのものの商品化現象において、原爆、ヒロシマ、被爆者たちさえもが商品化されている資本主義の性（さが）を明らかにしている点。二つ目は、悲劇の世襲性。人為でその世襲性を断ち切らない限り、それは世襲され、その中にいる人は地に落ちていくことを表現している点。三つ目は、人間性の墮落。本作品には、「被爆者を利用する人（他者）」と「被爆者であることを利用して金儲けする被爆者自身」の存在が表現されているが、いずれも自分自身の人間性を墮落させていると言わざるを得ない。

2.3.4 「夏の客」の意義

本作品は、被爆者の中には、国が開始した戦争の被害者でありながら、国による救済がなかったため、売春をするしか生きていくことができないうまで出たことを暗に訴えている。被爆地ヒロシマは観光地となり、被爆と被爆者そのものが観光資源化されている資本主義のおぞましが表現されているだけでなく、戦争の本質は国体としての国を守るための棄民に他ならないことが被爆者の棄民によって明らかにされたことを、本作品は現前化していると考えることができる。

2.4 「母・一九六七年夏」(1967年8月)

2.4.1 発表年と時代状況

(1) 発表年

本作品は、『潮流ジャーナル』1967年8月号に初出、のち1966年『幻影なき虚構』(勁草書房)に収録された。ここでは、『日本の原爆文学 5 井上光晴』ほるぷ出版(1983年)所収のものを参照・引用している。

(2) 時代状況

世界では、米ソによる宇宙開発競争が相変わらず繰り広げられている。(1967年4月23日、ソ連が有人宇宙船ソユーズ1号を打ち上げ、着陸に失敗。10月12日、ソ連の金星4号が打ち上げられ、同月18日、金星軟着陸に初めて成功。つづいて翌日19日、アメリカのマリーナ5号が金星の大気観測に成功し、11月9日、アメリカのサーベイヤー6号、月面軟着陸に成功。)6月5日、アラブ諸国・イスラエル間で戦闘が開始し、中東戦争が始まった。

日本では、本作品発表の前年の1966年には日本の人口が1億人を突破した。車・クーラー・カラーテレビの3C時代が始まり、同年、関西電力の夏期最大電力が全国で初めて冬期最大電力を上回り、夏期のピークが始まっている。1967年には、水俣病や四日市ぜんそくなど、公害病

が深刻化し、8月3日に公害対策基本法が交付された(企業の無過失責任は立法過程で除外された)。

原子力関連については、世界では、1月24日に米国原子力委員会が核兵器用プルトニウムの生産縮小を発表、1月28日、フランスがナトリウム冷却高速実験炉 Rapsodie が臨界を達成、5月30日、欧州3共同体 (EEC、原子力共同体、鉄鉱石炭共同体) の統合を決定、6月17日、中国が初の水爆実験成功を発表している。7月に、米国原子力委員会は、工学的安全防護に重点をおいた発電所建設基準の改訂案を発表した。11月8日、中華民国原子力委員会、50万 kW の原子力発電所を島内4か所に建設すると発表、12月10日、米国原子力委員会がガスバギー計画(核爆発の平和利用ならびに電力は水力28、火力65、原子力7の比率とする計画)による地下核実験を実施した。

日本では、前年に引き続き、核燃料を巡って政策検討が活発に行われ、4月13日に原子力委員会は原子力開発利用長期計画を改訂している。10月2日、動力炉開発の核となる動力炉・核燃料開発事業団が発足し、原研(現日本原子力研究開発機構)が進めていた動力炉開発に関する活動は、同事業団の管轄下に入った。

2.4.2 内容

戦後22年の長崎県の「海塔新田」(この作品の中では、佐世保の近くとされている。)で起こった放火殺人事件における事情聴取の場面。殺害された男は、12歳の時被爆したために結婚できない被爆女性(34歳)と、その女と半同棲していた男。実は妻子ある身ながら、お金目当てに被爆女性に近づいたのだった。警察の事情聴取にたいして、娘をかばおうとする母親の支離滅裂な受け答えを記述したもの。

女はその男の子どもを妊娠し、男に、もう少しまじめにおなかの子どものことを考えてくれと言うと、男は、ふんとあざ笑って言った。「お

前らケロイドに子供を生ませてやっただけでもありがたいと思え、丈夫な血を種馬代わりに突っ込んでやったんだからな」と。そして、男が出ていくことになったとき、別れるのだけはやめてくれと懇願する女に、男はこう言ったという。「ただし5万円作れば、もう二、三か月位相手をしてやってもいい。ピカでやられたオールド・ミスの相手をするんだから、そのくらいの金はボーナスにくれてもよからう」。その後その男は、殺害され、焼死体で見つかった。

(3) 要 点

本作品の要点は、原爆による人間の破壊の二重性と破壊されず残っている人間性であると思われる。原爆による人間の破壊の二重性とは、被爆者の人生の破壊と非被爆者の人間性の破壊である。それにもかかわらず破壊されず残っている人間性とは、母親がわが子を守ろうとする愛情である。

(4) 「母・一九六七年夏」の意義

戦後20年過ぎても終わらない原爆の悲劇。それでも、母親がわが子を守ろうとする姿は戦前から今にかけても変わることなく引き継がれている。本作品の意義は、母親の愛情の滑稽なまでの愚直さの中で原爆の罪深さを際立たせているところであろう。

2.5 「明日——一九四五年八月八日・長崎」

(1982年1月)

2.5.1 発表年と時代状況

(1) 発表年

本作品は、作家歴30年、原爆文学歴20年、井上光晴55歳のときの作品である。初出は、『使者』第12号、昭和57（1982）年1月号、同年5月に単行本化（集英社刊）された。ここでは、集英社文庫版（1986年）を参照・引用している。

なお、この作品は「第29回（昭和58（1983）年度）全国青少年読書感想文コンクール（高校

の部）」課題図書に選定されている。

(2) 時代状況

本作品が執筆された1980年代初頭、世界では、新自由主義が台頭し、米国でレーガン政権、フランスでミッテラン政権が誕生している。なお、本作品発表の前年（1981年）、アメリカで最初の AIDS 患者が発見されており、イギリスでは、世界初の ES 細胞の作成に成功している。

アメリカにおいては、1981年2月18日、アメリカのレーガン大統領が経済再建計画（レーガノミックス）を発表し、国防費の増大と他の財政支出の大幅削減を明らかとした。中国では、6月29日、中国共産党第11期6中全会で文化大革命が完全否定された。フランスでは、9月9日、政府は企業国有化法案（5企業グループと銀行36行）を閣議で承認し、10月26日、同法案は国民会議で可決した。欧州各地で平和運動が広がり、11月15日、アテネで20万人規模の米軍基地撤去要求デモが行われた。同日、マドリードでも NATO 加盟反対・反核デモがあり、11月21日、アムステルダムで30万人の反核デモが行われた。1981年には、4月9日～12日にかけて、西独の各地で反核・平和の復活祭大行進が行われ、48万人が参加、6月12日には、ニューヨークで100万人規模の国際反核デモが行われた。

日本では、1981年3月3日に国鉄再建法施行令が決定された。3月20日に中国残留孤児が初来日した。10月16日、北炭夕張新鉱でガス爆発および坑内火災が起り、坑道の火災を鎮めるために59人の不明者を確認しないまま坑道を水没させる（最終的な犠牲者は93名。最後の遺体が収容されたのは事故から163日後の翌1982年3月28日）、という悲惨な事故・事件が起きている。

原子力関連では、世界においても日本においても、世間を騒がす事件が本作品発表の前年（1981年）に起きている。世界では、同年6月7日、イラクのフセイン政権下で建設が進められていた原子炉をイスラエルが爆撃し、世界に衝

撃を与えた。アメリカでは、初の高温ガス冷却炉が1981年7月に100%出力運転に成功したが、軽水炉建設計画については延期あるいは中止が続いた。

日本では、1981年2月28日に反原発・反再処理・反海洋投棄東京集会が開催され、海外からの参加者を含めて約500人が参加した。原電敦賀発電所において1981年1月～3月にかけて放射能漏れがあったにもかかわらず原電が事故隠しを重ね、定期環境モニタリングにより一般排水路に放射能汚染が漏れていることが4月に発覚し、累計101人の被曝が明らかとなった。通産省は、1975年から稼働率の向上、従業員の被曝低減などを目標に軽水炉改良標準化計画を進めていたが、次の目標として日本型軽水炉の完成と第三次計画を1981年7月にスタートさせた。なお、1982年度より、高等学校教育課程の社会科に「原子力の活用」の項が初登場している。

2.5.2 内容

(1) 概要

本作品は、1945年8月8日、長崎への原爆投下前日、真夏の太陽の照りつける暑い昼過ぎから翌日8月9日午前4時17分過ぎ、夜は終わり新しい夏の一日がいま幕を上げようとしている静寂な時間（雀たちが囁りを始める直前）までの、長崎の「爆心地町域」で繰り返される、長い一日の人々のごく日常的な生の営みが綴られたものである。

(2) 内容

太平洋戦争末期、貧しい配給の時代、空襲警報の合間を縫い、精一杯のご馳走で祝言を挙げ

る中川庄司と三浦ヤエ、そしてその親族・友人の一日。物価統制令違反・収賄容疑で逮捕されて収監中の市役所主任代行の夫・堂崎彰夫に会いに行く妻。路面電車の運転手である水本広。国の勤務で呉に行ったまま任務の期限が過ぎても戻って来ない恋人・高谷藤雄の子どもを妊娠していることが判明した福永亜矢。そして、子どもを産むために長崎に戻ってきたツル子（新婦ヤエの姉）の陣痛の合間に展開される、ツル子と母親との会話とそれまでの思い出の回顧、そして自分の命をかけて産み落とされる一つの新しい命が放つこれから生きようとする輝きとその命に注がれる慈しみ―原爆投下直前の人々のそれぞれの偶然と必然が織りなす生の凝縮された営みを、資料に綿密に当たり自ら検証することによって正確に再現し、想像力によって肉付けした作品となっている。

井上は、「あとがき」において、次のように述べている。

小説『明日』の構成にあたって、私は可能な限りありのままの八月八日を再現しようと試みた。幾度となく浦上川の橋上に立ち、「浜口町」や「橋口町」の坂を行き来しながら、ノートはようやく整いはじめ、密集する家々に干された洗濯物を見ながら、なぜか戦慄とする思いにうたれた。

一章から零章に至るまで、ストーリーのための虚飾は用いなかった。一九四五年八月八日、長崎における結婚式は実際に行われており、「無学党」²¹の市役所課長や主任等四人が、物価統制令違反、収賄容疑で逮捕され、浦上刑務支所²²に収監されていたことも、作り話ではない。

登場人物の内質は虚構の方法によったが、八

²¹ 「無学党」については不明。

²² 長崎市原爆資料館の「平和・原爆周辺マップ」によると、長崎刑務所浦上刑務支所は、爆心地より北へ最短約100m、350mの地点（岡町）にあり、爆心地に最も近い公共の建物であった。原爆により、刑務所内にいた職員18名、官舎居住者35名、受刑者および刑事被告人81名（うち中国人32名、朝鮮人13名）計134名全員が即死したという。周囲高さ4m、幅25cmの鉄筋コンクリート塀は一部を残して倒壊し、庁舎は全焼、炊事場の煙突のみが残ったという。

月九日、午前十時、長崎地方裁判所で開かれる予定の第一回公判もまた事実であり、弁護士の場合でそれは延期になったのだ。爆心地より遠く離れた長崎地裁に出廷しておれば、四人の収監者は助かっていた。そのような偶然と必然の錯綜した生死の運命は、当然のことながら、八月八日の長崎に住む人間の数だけ揺れ動いた。

路面電車を運転する水本広とその妻の「明日」もそこにかかっている。移住地の蛍茶屋は閃光を遮る地域にあるのだが、九日の午前11時2分、彼の電車は果たして何処を走っていたのだろうか。(井上1982=1986:213-214)

2.5.4 要 点

本作品は、核を巡る状況が緊迫感を帯びてきたときに書かれた。本来、人は、戦争とは無関係に、生まれ、恋愛し、結婚し、さらに女は自分の命をかけて新しい命を産み落とし、そして必然と偶然の中で死んでいく。その日常性の確保こそが、政治の役割のはずなのに、それを一瞬のうちに破壊に導く「戦争」が政治の一形態であることを、本作品は読む者の前に現前化する。

また、本来は「偶然と必然の錯綜した生死の運命」(井上『明日』「あとがき」1986:214)であるはずの人間の運命が、原爆投下によって激震し、人生における必然が消滅したかのような世界の出現について、井上は、敢えてそれを語らないことによって、それを明らかにする。外部の圧倒的な出来事に翻弄される生の出現、または近代の象徴であった主体性の剥奪、あるいは宿命論の勝利による、個人の生きる意味の消失という、人間にとって重大な事態の出現を、井上は問う。それはまた、過去と分断された時代の出現をも糾弾する。原爆のある世界において「明日」は、誰の上にも平等に来るとは限らない。それは、「偶然性の排除としての正義」の消滅をも意味する

なお、本作品において、戦時中における徴兵

制度と配給制度に代表される生政治による人間の種別化の進行についても、井上は描写している。

(5) 「明日」の意味

本作品のタイトルの「明日」の意味であるが、もちろん、文字通り、ここでの「明日」とは原爆投下の日を指すと同時に未来を指すと考えることができる。

しかし、本作品においては、もう一つの意味があるように思われる。

井上は、別のところで次のように述べている。「われわれは意識するしないにかかわらず、自分の運命をより自由にするため、少しでも自由になるために、現在の時間を未来に向かって選んでいくわけです」(井上1964=2008:66-67)。つまり、明日とは、単なる時間の流れや区切りとしての未来ではなく、連続と続く人々の営みに内包された可能態の拡大の運動そのものであり、同時に「今日」の在り様を問う概念である。

本作品は、第1章から第9章へと進められ、最後に零章となる。それは、人間の自主的な選択の可能性の最小化あるいは人間が本来あるべき人間として存在できない時間の出現を意味する。それが、私たちが何もしないと出現するであろう、現代社会における「明日」という日の正体である。翻って、「明日」を内包する「今日」という現代社会の在り方と私たちの生き方・あり方をも、井上は読者一人ひとりに鋭く問うことになる。²³

3. 原爆文学の誕生と井上の原爆文学の意義

3.1 原爆文学の誕生：ヒロシマ・ナガサキが残したものとしての原爆文学

1945年8月6日と8月9日の後と前とでは、私たちの住まう世界は全く異なる。ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下以降、私たち人類は、意識しているか否かを問わず、全ての者が核によって

支配され包含された世界の中で生きるようになり、皮肉にも全人類が真の意味での運命共同体となった。グローバルな〈生政治〉が展開可能かのような世界の出現である。

核によって支配された国際社会が問題なのは、意識しているか否かに拘わらず、核を有している国に他国が従属せざるを得ないという構造的暴力によって国際社会が動かされている、ということにある。そして、そのような国際政治によって一国の国内政治とそこに住まう人々の生命が左右されている、ということにある。私たちの生は、核を中心としたパワーゲームに委ねられているのである。(資本主義社会が資本あるいはお金によって支配されている社会であるのならば、私たちの世界は核によって支配されている核主義社会と言えるかもしれない。)

フーコー (1975=1977) によれば、近代以降、生政治 (bio-politique) が行われるようになったと指摘されている。だが、ここに述べたような世界は真の意味での生政治の行われている世界なのだろうか。

生政治とは、人間の生が人々の生命倫理²⁴によって制御されることによって国家の人民支配の力をさらに強固とする構造をもつ政治を指すように思われる。しかしながら、現代社会においては、私たちの生のあり方を規定する倫理が政治支配の手段として使用されること以上に恐れるべきことが存在する。それは、核兵器の使用の可能性によって私たちの生命が支配されているのではなく、核のボタンが間違っ

れる可能性が存在する、ということにある。私たちの生は、核や核保有国それ自体によってではなく、何か得体のしれないものによって牛耳られている。換言すれば、私たちの世界を支配するものは、核というよりも、あるいはどこかの特定の国というよりも、またはどこかの国の大統領というよりも、核を不用意に使用する可能性がある狂人である、ということである。それは一人の人であるかもしれない、「イスラミック・ステイト」と名乗っている武装テロ集団のような集団あるいは組織なのかもしれない。(このような国際社会は、もちろん全ての国・民族・人が対等な発言力と影響力を有する民主制などでもなく、少数の大国・一部の民族や人々が力をもつ寡頭制でもなく、狂人によって支配されている狂人制と言えるかもしれない。) テロ集団は、その狂人の象徴的姿である。すなわち、私たちの生命は、もはやどのような者によっても制御可能な地点を離陸してしまったのかもしれない。私たちは、生政治の擬制のもとに、実は生政治の終焉の世界に突入してしまっているのかもしれない。

そのような極度の危険な状態は、戦後の「原子力の平和利用」という名の下に増幅されてきた。万能の神ではない人間には様々な過失と「想定外」がありえるが、原子力管理において過失と「想定外」は決して許されない。なぜなら、一旦漏れ出た放射能を制御する術を人間はもっておらず、放射能は、現代に生きるあらゆる生命体と未来の生命体へと繋がれているその

²³ 歌手・坂本九氏の1963年12月にリリースされた『明日があるさ』という名前のヒット曲がある。この曲は、1985年8月12日、坂本氏生前最後の仕事となったNHK-FMの『秋一番坂本九』の番組収録の際、坂本氏が歌った楽曲でもある。坂本氏は、この収録の後、乗員乗客524人を乗せた羽田発大阪行き日本航空123便ボーイング747型機に乗り合わせ、午後6時55分、群馬県と長野県の県境にある御巣鷹山(群馬県側)にて、519名とともに帰らぬ人となった。これは、残念ながら科学技術の応用の失敗例である。人間は、自己が死すべきものであることを自覚しているものの、「今日と同じような日として明日も必ず来る」と信じて暮らしている。戦争、科学技術の悪の応用としての原爆、そして科学技術の応用の失敗は、そのような未来への希望や確信を人間から奪うものである。

²⁴ ここでの生命倫理とは、生命に関する人々の倫理観だけではなく、生命に関する法制度や政治政策を含めた文化現象一般を指している。

遺伝子を傷つけるものだからである。

原子力の存在と生命との間にはこのような重大な矛盾と溝があるにも拘わらず、2015年10月16日現在、世界には438の原子炉が存在する²⁵。日本においては17か所48基の商業用原子炉²⁶が存在しており、さらに現在、6基が建設中もしくは建設予定（大間1基、東通4基、島根1基）となっている。

2014年度には原子力発電所の稼働率は0%であったが、本稿執筆中の2015年10月17日現在では日本に存在する商業炉中、川内原子力発電所（1号機93.4万kW）が運転中となっているだけでなく、川内原子力発電所の2号機もこの原稿が印刷される頃には運転再開されていることであろう。さらに、新規規制準への適合性確認をほとんどの原子力発電所が申請中であり、適合性が確認されれば、いつ稼働再開の事態となるかもしれない状態である²⁷。

また、たとえ稼働していないとしても、原子力・核が存在していることには変わりがなく、事故によって放射能漏れが生じる危険性は存在している。さらには、原子力発電所・原子炉の存在は、その発電所・原子炉そのものへのテロや自然災害による危険だけでなく、燃料の輸送におけるテロや事故による危険も内包している。これは、日本だけの問題ではない。放射能漏れ

が生じた場合、空気や海を汚染し、それは全世界を汚染する。地球の消滅をもたらす危険の契機を原子炉は孕んでいる。このような全世界に影響を与えうるものを一国が独自の判断でもつことは、本来ならば許されるものではないだろう。

このような極度の危険な状態の中で私たちは生きている。国家というものがその構成員の生を守る枠組みだとしたら、私たちに本当の意味での国家はないと言わざるを得ない。このような社会において政治は機能不全となり、人々も政治に無責任となる。さらに、このような世界においては、人々は刹那的な生き方を選ばざるを得ない。自分の人生を自分のものとして制御できず、自分の人生の物語を描くことさえできない。なぜなら、全ての人はいつでも不条理な死と隣り合わせに生きているからである。

人は未来に向かわず、死にのみ向かう。1945年8月6日と9日を境に、これまでの物語は崩壊し、そうかといって新しい物語も産まれない世界に私たちは生きている。自分自身の物語を作り上げようともがき苦しんでも、それが描けない世界へと世界は変質した。

死と隣り合わせになっていること自体が問題なのではない。実はそれはいつの時代もそうであったとも言えるからだ。問題は、自らの世界

²⁵ IAEA (International Atomic Energy Agency : 国際原子力機関) のウェブサイトの PRIS (Power Reactor Information System) (<https://www.iaea.org/PRIS/WorldStatistics/OperationalReactorsByCountry.aspx> 2015年10月17日閲覧) によると、世界の原子炉は438、発電量379,0055kW、うち日本の原子炉は43、発電量40,290kWとなっており、数と発電量ともに世界の10分の1であり、アメリカ(99炉、98,708kW)、フランス(58炉、63,130kW)に続いて第3位を占めている。

²⁶ IAEA 発表のデータと若干異なるが、各電力会社発表の2015年11月4日22時時点での数値を総計すると、日本の商業用発電所は17か所、48基である。内訳は、日本原子力発電(東海第二、敦賀2基)3基、北海道電力(泊)3基、東北電力(女川3基、東通)4基、東京電力(福島第一2基、福島第二4基、柏崎刈羽7基)13基、中部電力(浜岡)3基、北陸電力(志賀)2基、関西電力(美浜1基・高浜4基、大飯4基)9基、中国電力(島根)2基(3号機を建設中)、四国電力(伊方)3基、九州電力(玄海3基・川内2基)6基、計17か所、48基。(一般社団法人日本原子力技術協会ウェブサイト www.gegikyoku.jp/facility/powerplant.html よりリンクされた各電力会社の原子力発電所運転状況のリアルタイムデータ(2015年11月4日)から集計した。)日本原子力研究開発機構の研究炉は3か所、8炉である。

²⁷ 九州電力は、川内原発1号機を2015年8月11日に再稼働させたのに続き、川内原発2号機を10月21日に再稼働させた。九州電力のホームページ上に掲載されているリアルタイムデータによると、2015年11月4日現在川内原発1号機は93.3万kW、2号機は93.1万kW発電している。

観や自らの人生観によって自らの人生を全うできなくなったことにある。私たちの生は、私たちの死が不条理な死へと変化したのに伴い、不条理な生へと変容した。死にながら生きている私たちに言葉の真の意味での明日はない。その意味で世界は大きな綻びをもつ時代に、自らの物語を紡ぐことができない生きづらさをもって人々は生きざるを得ない。

このような世界に、原爆文学は誕生した。

3.2 井上の原爆文学の意義：未来への道程としての原爆文学

原爆文学作家の一人として井上光晴がひととき光を放つ。それは、他の原爆文学と一線を画す独特の特徴をもっているからである。

少なくとも、原爆文学は二つの種類に分けることができる。一つは、原爆体験者自身が、その体験の意味を問い、あるいはその体験を後世に伝えるためにその体験を記録し、その中においてでさえも命の輝きを賛美し、希望を歌い、平和な社会の実現を祈るものである。「祈りとしての原爆文学」と名づけられよう。もう一つは、原爆の体験者であるか否かを問わず、原爆の意味を問い、原爆を内包する現代社会の矛盾を表現するもの、である。

井上の原爆文学は後者に属する。井上自身は被爆者ではなかったが、被爆と被曝の問題を自分自身の問題かつ社会全体の問題として捉え、原爆や原発の問題を通して、現代社会の構造と人間自体を見つめ、現代社会のカラクリと人間の性（さが）を明らかにする。そして、その人間の性ですら、この現代日本あるいは現代世界という暴力的構造をもつ土壌によって構築されたものに過ぎないことを明らかにする。

井上の作品は個人的な体験を明らかに超越し、複数かつ多様な当事者性の視点を獲得している。それは、まるで聖書の作成技法とでも呼べるような手法である。マルコ、ルカによってイエスの神性が証言されたように、複数の人による証

言が重なることによって真実を浮かび上がらせる。そこに綻びがない。緻密に考え抜かれたプロット。それは骨組みが、検証された事実裏付けられているからと言える。肉付けは作家としての想像力の賜物である。真に生きている人間が登場するがために、感情移入が起こり、無情の死や不条理な生に憤りややるせなさを感じざるを得ない。いざ、現実に戻されたときに、おまえは何をやっているのか、と自問せずにおられない。

さらに、井上は、原爆文学と原発文学との間を架橋し、原爆と原発に関する綿密な取材と確固たる思想をもとに、小説という虚構の中に、隠蔽され抑圧されていた真実を浮かび上がらせ、私たちの未来を照射している。井上の原爆文学は、時代状況が生み出したものではなく、未来を逆照射し、未来を変えるためのもの、社会を変革するためのものである。すなわち、井上の原爆文学は、「未来への道程としての原爆文学」と名付けることが可能である。

表現不可能なものを表現する努力。言葉は非本質的なものであるため、決して本質を明らかにすることができないはずなのに、敢えてその言葉によって本質を明らかにしようとする、不可能を可能に変える挑戦。—それが文学かもしれないが、井上の原爆文学は、社会を変革する道程を作り上げようとする、不可能を可能に変える挑戦である。

4. 結論：原爆文学の原爆文学たる所以

本稿においては、第1章において、現在の社会がおかれている状況ならびに筆者の問題意識を述べ、これから検討する原爆文学の定義について議論した。第2章においては、井上の五つの原爆関連作品を分析し、第3章において、井上の原爆文学の意義をまとめた。

フィクションという名のノン・フィクションこそが、井上の原爆文学である。出てくる人物

の内実は想像によって肉付けされているものの、できごとは全て本当にあったこと、あるいは今まさに現在進行形となっている事象である。井上の作品には、その作品の中に読者が入り込むしかけが採用されており、読者は作品の中に自ら入り込むことによって原爆を体験し、記憶し、後世に伝えることができる仕組みとなっている。

しかも、井上の思想は、ナショナリズムの枠には留まらなかった。井上は日本人とは何かを問わない。日本社会のあり方を問うと同時に人間とは何かを問い、そして、社会によって制約を受けている人間の在り方と社会そのものを糾弾する。一人ひとりが政府に愚弄されない市民となり、正しい政治の在り方と自らの社会の未来を導く世論の担い手とならなければならないが、井上の作品はその為の教材となり得よう。作品を通して、読者を政治と架橋してくれるからである。

井上にとって小説とは、現代を貫く暴力的構造を炙り出すことにより、社会を変革しない限り私たちに人間として生きる場としての未来がないことを読者に迫るものである。個別の事象から普遍的な原理を導くだけではない。描写することが決して可能ではない本質の影をそれぞれの読者に読みとることを迫るのである。優れた小説とは、読者をしてあるべき異なる未来を描かせる小説であるということを、井上の作品は読者に論してくれる。

フェルマン（1995）は、次のように指摘する。

ホロコースト、ヒロシマ、ヴェトナムの時代にあって—つまり証言の時代において—教えることは、それ自体が証言を行い、何事かを生起させなければならないのではないか。あらかじめ型にはめられ、実体を与えられ、前もって理解されることがわかっているような受動的な知識や情報、つまり、これは完全な予見であると誤って考えられているような事柄を、単に伝えるだけではいけないのではないか。（フェルマン 1995：93-94）

井上の原爆文学は、このフェルマンの問いにたいする応答となっている。井上の原爆文学は、原爆投下を契機として出現した新しい生の在り方と世界秩序の擬制の内に、非本質的な言語によっては描写不可能な本質の影を炙り出し、文学の中から未来を変えようとする営みと捉えることができよう。

表現形態としての文学におけるジャンルは、その中に表現しようとしている思想によって区別されるのではないだろうか。表現不可能なものを表現しようとする努力、その中から開かれていく新しい世界の出現をめざそうとする闘いとしての文学において、ジャンルはそのような意味をもつのではないだろうか。原爆後の社会を描き出すことによって、自らの体験を超えて日本や社会の本質を浮かび上がらせようとする試み、または現代社会に対する明確な抗議、あるいは読者をその磁場に誘い、考えさせ、行動を起こさせようとする運動の表象形態としての文学作品こそ、原爆文学という名にふさわしいものなのであろう。だとしたら、井上の原爆文学こそ、原爆文学の名にふさわしいものと言えるであろう。

5. おわりに

本稿は、井上光晴の原爆文学の意義を見出そうとする努力だけで終わってしまい、しかもその道も半ばである。今後、本稿の議論を深めるとともに、とくにフーコー、アーレント、アガンベンと続く生権力の系譜並びにフロイトのエロス・タナトス論から原爆文学の意義を探りたい。

自由を導く日常性の確保こそが政治の役割であるにもかかわらず、それにたいして不能な、あるいは逆行する、政治。政治とは、非人間的なものであると同時に、それ以上に反人間的なものであるという井上の主張は、少なくとも現在の日本においては、正しいと言わざるを得な

い。

人間を大切に政治ではなく、経済を優先する政治に、私たち日本人は、まるで飼いなされた犬のようになってしまった。私たちは、一人ひとりが政府に愚弄されない市民となり、正しい政治の在り方と自らの社会の未来を導く世論の担い手とならなければならない。それに資する目的で、政治の虚構を暴き、自由を求めて文学を紡ぎだしていった井上光晴の姿勢に見習い、原爆文学の意義ならびに生政治と生命倫理の意味をさらに追究したい。

謝 辞

本研究のきっかけを与えてくださった国際基督教大学教授川本隆史先生ならびに東京大学大学院教授金森修先生に、この場をお借りし、心からの感謝を申し上げます。またお二人の先生方におかれましては、ご健勝にご留意の上、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

参考文献

- アガンベン、ジョルジョ (2001) 『アウシュヴィッツの残りもの—アルシーヴと証人』上村忠男・廣石正和訳、月曜社。(Agamben, Giorgio, *Quel che resta di Auschwitz: L'archivio e il testimone*, Bollati Boringhieri, 1998.)
- 秋山康文 (2002) 「井上光晴『手の家』と深沢七郎『櫛山節考』」『原爆文学研究』1, 108-109, 2002-08.
- 李在錫 (2002) 「『原爆』『原爆文学』『私』」『原爆文学研究』1, 104-6, 2002-08.
- 井上荒野 (2005) 『ひどい感じ 父・井上光晴』講談社。
- _____ (2010) 『切羽へ』新潮社。
- 井上光晴 (1960=1983) 「手の家」『日本の原爆文学 5 井上光晴』ほるぷ出版、10-30.
- _____ (1963=1992) 『地の群れ』河出書房新社 (『文芸』1963年7月号に初出。1963年9月、河出書房新社より単行本として刊行)。
- _____ (1964=2008) 「私はなぜ小説を書くか」『井上光晴集—戦後文学エッセイ選13』影書房、65-78.
- _____ (1965=1983) 「夏の客」『日本の原爆文学 5 井上光晴』ほるぷ出版、134-144.

- _____ (1967=1983) 「母・1967年夏」『日本の原爆文学 5 井上光晴』ほるぷ出版、145-151.
- _____ (1969=1983) 「病み犬を連れた老婆—『地の群れ』の舞台」『日本の原爆文学 5 井上光晴』ほるぷ出版、302-304 (『朝日新聞』1969年8月14日号に初出)。
- _____ (1983) 『日本の原爆文学 5 井上光晴』ほるぷ出版。
- _____ (1986) 『明日—一九四五年八月八日・長崎』集英社。
- Ochiai, Eiichiro (2014) *Hiroshima to Fukushima: Biohazards of Radiation*, Berlin, Heidelberg: Springer-Verlag.
- 川口隆行 (2001) 「『原爆文学』という問題領域 (プロブレマティーク) — 「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは『原爆文学史』 — 『プロブレマティーク 文学/教育2』、2001年7月号。
- _____ (2002) 「『原爆文学』という問題領域・再考」『原爆文学研究』1, 15-21, 2002-08.
- _____ (2008) 『原爆文学という問題領域』創言社。
- 川村湊 (2011) 「解説 原爆文学論序説」柿谷浩一編『日本原爆小説集』水声社、241-249.
- 高木仁三郎 (2012) 『科学の原理と人間の原理—人間が天の火を盗んだ—その火の近くに生命はない』方丈堂出版。
- 田中利幸・ピーター・カズニック (2011) 『原爆とヒロシマー「原子力平和利用」の真相』(岩波ブックレットNo819) 岩波書店。
- 長岡弘芳 (1973) 『原爆文学史』風媒社。
- _____ (1977) 『原爆民衆史』未来社。
- 長野秀樹 (2002) 「井上光晴『手の家』の構図」『原爆文学研究』1, 72-79, 2002年8月号 (創刊号)。
- 成田龍一 (2014) 「解説 「被爆」と「被曝」をつなぐもの」井上光晴『西海原子力発電所、輸送』講談社、344-361.
- 野坂昭如 (2011) 「乱離骨灰鬼胎草」『日本原爆小説集』水声社、47-76 : (『乱離骨灰鬼胎草』所収、1984年1月、福武書店刊に初出)。
- フーコー、ミッシェル (1977) 『監獄の誕生』田村俣訳、新潮社 (*Michel Foucault, Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Editions Gllimard, 1975)。
- フェルマン、ショシャナ (1995) 『声の回帰 : 映画『ショーア』と「証言」の時代』上野成利訳、太

- 田出版 (Shoshana Felman, “The return of the voice: Claude Lanzmann’s Shoah,” In: *Testimony: crises of witnessing in literature, psychoanalysis, and history*, Shoshana Felman and Dori Laub, 204-83, New York: Routledge, 1992 and “Film as witness: Claude Lanzmann’s “Shoah”, In: *Holocaust remembrance: the shapes of memory*, edited by Geoffrey Harman, 90-103, Cambridge, Mass.: Blackwell, 1994).
- 深津健一郎 (2010) 「「当事者」になること—シンポジウムを振り返って (特集 原爆表象／文学と政治的リアリズム) 『原爆文学研究』9, 124-126, 2010年12月号.
- 山本義隆 (2011) 『福島原発事故をめぐって—いくつか学び考えたこと』 みすず書房.

ラズロ、アーヴィン (2010) 『World Shift』 ワールドシフト・ネットワーク・ジャパン監修、ビオ・マガジン.

参考 URL

- IAEA (International Atomic Energy Agency: 国際原子力機関) のウェブサイト <https://www.iaea.org/PRIS/WorldStatistics/OperationalReactorsByCountry.aspx> (2015年10月17日閲覧)
- 一般社団法人日本原子力技術協会のウェブサイト www.gegikyou.jp/facility/powerplant.html ならびに本 URL にリンクされた電力各社の原子炉運転状況 (リアルタイムデータ) (2015年11月4日閲覧)
- 原爆文学研究会のウェブサイト <http://www.genbunken.net/goannai/goannai.htm> (2015年10月12日閲覧)